
ペナルティ5

謎沢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペナルティ5

【Nコード】

N1828B

【作者名】

謎沢

【あらすじ】

ペナルティシリーズ第5弾。何か計画をたくらみ始めた現代人。それは未来を超えてある行動をする。

ペナルティ5ー1（第1話〜第10話）（前書き）

ペナルティ第5弾です。なお、今回、再び第一話からになっています。

ペナルティ5－1（第1話～第10話）

Ⅱ第1話 音Ⅱ

ペナルティが学校内でのいじめがなくなった頃、ある男がある作戦を考えていた。それは一人の老人だった。

その老人は電車のマナーの悪さに怒りを感じていた。若者が聞いている音楽再生プレイヤーの音を嫌っていた。

そして、老人は作戦を考えついたのだった。しかし、老人にも何も出来なかった。

その頃、熱斗の世界では、ある研究をしていた男がいた。

それは電波の研究だった。しかし、電波を使うのにはそこは不適な場所だった。なんと鉄道が横を走っているのだ。（電波障害といい、線路付近の住居にいろいろな影響を与えることがある。また、電車の走行によって、鉄道のシステムが狂うことがある。）

そのため、うまく研究が出来なかった。しかし、この二つがこの後結びつくことになる。

そのきっかけは、電波研究をしている矢沢のほうからだった。

矢沢のところにある男が来たのは、ちょうど真冬だった。

矢沢が一個99円のカップラーメンをすすっていると、ある男は来たのだ。その男の名刺には「未来開発」と書かれていた。

そして、男は話し始めた。

「私、未来開発という夢実現プロジェクトを行っています。相川と申します。」

そして、矢沢は聞いた。

「夢実現プロジェクトって、何ですか。」

相川は答えた。

「夢プロジェクト。それは、あなたの夢を実現するためのものです。」

それに矢沢は心を打たれた。

早速、相川の口車に乗せられた矢沢だったが、一体、相川と言う男は何をたくらんでいるのであろうか。

ところで、ペナルティたちはどうしているのであろうか。

ペナルティのいじめは少しだが改善されていた。

そして、ペナルティはよく未来に行く。しかし、これは誰にも内緒だ。

このようにして、現代の平和は守られているのであろう。

しかし、それを壊すものというのはいるのである。その一人には、相川も・・・。

Ⅱ第2話 ヨソウガイⅡ

相川はなんと、老人のところへ来ていた。どうやってきたのだろうか。それはともかく、相川は老人にこう言った。

「川崎様、ご準備が出来ました。」

「そうか。」

川崎その報告を聞いて、喜んだ。あとは、それが音を消すことが出来るかをしらべるだけだった。

次の日、川崎と相川は会議を開いた。

「さて秘密会議を開く。まず、メモを取るな。」

「はい。」

「スパイはいないか。」

「はい。」

「予想外だ。少しは駄洒落についてこい。」

「はい。」

「それでははじめる。まず、費用は0円。あらかじめ、周波数を変えて、音波を消せるようにする。」

「はい。」

相川はさっきからはいとしか言っていない。

「本当にこれであっているのか。もし政府にばれたら、公正取引委員会から苦情をいただくぞ。」

「はい。」

「では会議終わり。終わり。」

なんと3分で終わってしまった。ついでに言うと、相川はいいしかなかった。

そして、プロジェクトが始動し始めたのだった。二人の狙いに向かって。

ペナルティは休日に渋谷に出かけた。渋谷と言っても、バスで20分ぐらいだ。しかし、渋滞に巻き込まれると一時間ぐらいだが、そんなことよりも、ペナルティの目的は日焼けサロンではなく、映画である。渋谷の映画館と言えば、渋谷東急である。古い映画館だが、ここは東京の戦後を見てきたといっても過言ではない。

そんな映画館にペナルティが見に来たのが、地球沈没という映画だった。音がこの世からなくなり、ついには、猿惑星から来た猿人に地球が征服されてしまうという話であった。

ペナルティもあんなに不思議な出来事にあっているものにもかかわらず、どうやら、まだ映画を見たいらしい。今までの出来事を映画に出来るのに・・・。

しかし、まさか地球から音が消えるとは思っていないペナルティ。それこそヨソウガイだ。

第3話 音波電波共振装置

「技術者の派遣をいたします。」

そんな手紙が矢沢に届いた。矢沢はそれに喜んだ。

「矢沢さん。」

矢沢の住んでいるアパートに宅配便風のお兄さんが来たが、これはあくまでも技術者である。どうやら、相川命名によると「Eコレ技術者派遣協会」という名前らしい。

そして、技術者と矢沢は作業を始めた。

その頃・・・。T O K Y O S I B U Y A。　（なぜ英語なんだ？）

「まもなく一番線に急行　中央林間行が参ります。危険ですから黄色い線の内側までお下がりください。」

電車（なんだか、今日はハイテンションだな。）が来た。

そして、ペナルティは帰途についたのだった。

技術者と矢沢は最後のところまで来ていた。あとは、電波を発射する装置をつけるだけだった。

まさか、このときもうプログラムが変更されていた。しかし、そのプログラムには欠陥があった。

「さて試験運転をしましょうか。」

いきなりの矢沢の発言に技術者が驚いた。さすがにここでやられたら困る。しかし、試験をしなければ、ちゃんと動くのか分からなかった。

「はい。」

技術者はおそろおそろ返事をした。

そして、ついに機械が動き始めた。しかし、すぐにとまってしまった。

「どうしたんだろう。」

矢沢は首をひねった。しかし、矢沢には原因がわからなかった。

「じゃあ、今日はもうこれでいいです。もうおそいですから。」

技術者はほっとしたのと、落胆を持ちながら、川崎のところへ戻っていた。

技術者から聞いた川崎も同様に落胆した。川崎は、プロジェクトが暗礁に乗り上げ、もう動けないかもしれないと聞き、このプロジェクトをあきらめることになった。

川崎にとっては、とても残念な結果だった。

一方、矢沢は、これが出来ないことに気がついてしまった。たしかに電波から音波を作ることは出来た。

しかし、その電波と音波を変換する部分で問題があったのだった。これは矢沢には解決できるものではなかった。その夜、一人でその機械を外へ出した。

Ⅱ第4話 優等生の腐敗？Ⅱ

次の日、ペナルティは学校に行った。もうそろそろ受験だ。今は塾へ通わなければ、とんでもないところへ行かされる。

そして、ペナルティは授業を普段と同じように受けていた。

授業中、ふと前を見るといつも成績上位者の航空こうくう園公えんこうが授業をノートに取っていないかった。確かに、後ろの連中はノートも取らずに漫画だの雑誌などを広げて読んでいる。しかし、まさか航空がほかの事をやっているとはペナルティも思わなかった。

放課後、ペナルティが帰ろうとすると航空がペナルティを呼んだ。

「どうした。」

ペナルティが聞く。それに航空がこう言った。

「今日、新宿へ行かねー。」

その言葉にペナルティは驚いた。新宿に夜行くと言うことは……。ペナルティは連想した。新宿は昼の街と夜の街に分かれているという。それが一緒になると、眠らない町になるというのだ。そして、夜の町と言えば、西武新宿駅のあたりが活気づく時である。サラリーマンたちはこれから一時間かかるといわれる埼玉の奥地に帰るための休憩をそこで取るのである。しかも、その休憩所は値段がすごく高い。そして、サラリーマンたちは鼻の下を伸ばし。さらには脳がおかしくなるほどお酒を飲むのである。

一方怖いのは、マフィア存在である。マフィアたちは日々、闘争を繰り返している。中には、一般人も巻き込まれることがある。そのため、新宿駅の掲示板にはお助け「XYZ」が書かれ、新宿駅長は苦勞を強いられるらしい。（なんだか、新宿を語っていますが、これは、すべてあるサイトからの得た知識だといったら、どうおも

うか。」

そんな町に誘われているのである。返事がしがたいが、航空のことだから大丈夫だろうとペナルティは返事をしてしまった。ここから、また新たな出来事に巻き込まれるとはペナルティも思っていなかっただろう。

Ⅱ第5話 川崎。未来へプラグイン？Ⅱ

ペナルティと航空は夜の新宿に来た。小田急線の急行ホームからなぜか先頭の改札を出て、外へ出た。そこは西口だが、さらに航空は大ガードのほうへ向かった。

ペナルティはいやな予感がした。大ガードをくぐればそこはあの町の入り口だ。

「どこ行くんだ。航空。」

ペナルティは航空に話した。しかし、航空は無口のまま、ガード前の信号を渡った。そして、ガードをくぐった。

ついに航空とペナルティは大人の夜の街に入ってしまった。ペナルティはびくびくしていた。そして、航空はペナルティに何も言わずにある雑居ビルへ入っていった。

「おいちよっと待てよ。」

ペナルティは、雑居ビルの前で航空にこう言った。しかし、航空はまた聞かなかった。

その頃、川崎は相川にこう言われた。

「今のプロジェクトがだめになったのならば、未来でもう完成しているウラの技術をこちらへ持ってきてみましょう。」

それに川崎は乗ってしまった。ついに二人で未来に行くことになった。

早速、川崎と相川は未来へ行くゲートをくぐった。

雑居ビルへ向かったペナルティを待ち構えていたのは、屈強な男たちと何人かの女の人だった。

「航空。」

ペナルティがそう声をかけた。それにやっと返事をした。しかし、もう航空ではなかった。

「ほんとにありがとさん。ところで君に用があったから誘ったんだが、別に驚かなくなたっていいじゃないか。君に助けてほしいんだよ。」

「何を。」

「実は、今、この現代を変えてしまうような悪巧みを考えている奴がいる。そして、未来には、とても怖い兵器が存在する。この二つがマッチしたとき、この世の中はどうなるかね。」

「それは、大変なことになる。」

「そうだ。それが現実に起きようとしているんだ。それを解決、S LOVEしてほしいんだ。」

航空はペナルティに助けを求めたのだ。それにペナルティは応じないということは有り得なかった。

Ⅱ第6話 新線新宿発未来行?Ⅱ

ペナルティは再び新宿駅に戻った。しかし、方向が違っていった。ペナルティはあるところへこれから飛ばされるのである。

そして、ホームに入って来た電車に乗った。しかし、なぜか他の乗客はこの電車に気がつかない。

そして、列車は発車した。

「さて、お待たせいたしました。本日も京玉電鉄をご利用ありがとうございます。この先、一時とてつもないゆれに見舞われる場合がございます。ご注意ください。」

京玉鉄道?

ペナルティは不思議がった。たまたま先頭に乗り合わせたので、ど

んなところを問うて行くのか気になった。そして、先頭に立った。もうそろそろ、トンネルを抜けるところである。

ペナルティがたった時、急に加速し始めた。これから伝説が加速するのである。そして、玉川上水を掘った兄弟も驚くような現象がその後おきるのである。

「一揆に110kmを出すぞ。」

運転士は意気込んでいた。そして、トンネルを出た。そして、駅までまっすぐ登っていく。なんと、電車が浮き始めたではないか。

「ATN作動。」

運転士の言葉に不思議がった。ペナルティは

「ATM？」

と言った。そしたら運転士が運転室から出てきた。

「おいそこ。さっきから何をいつてるんだ。」

それにペナルティはさっきからの疑問を投げかけた。

「おいおい。そんなことも分からないのか。ATNとは、謎沢氏（筆者）が作成したEXCELファイルのことで、これを使ってこの電車は制御されているのである。そして、決して、京玉電鉄というのは、“耳を澄ませば”で出てきた鉄道ではないからな。」

そんな説教をしていると、車掌が次の駅の案内をし始めた。

「次はなつひ野、次はなつひ野です。鳴くころ寺はこちらが便利です。」

「なつひの？」

ペナルティには何でもかんでも不思議だらけだった。

Ⅱ第7話 なつひ野教？Ⅱ

そして、なつひ野駅に着いた。しかし、駅から不思議さ満点だった。「はるひ野の間違いじゃないんですか。だって、どこからどう見ても小田急線の70番目の駅、はるひ野じゃないですか。」

そこは、駅舎こそきれいなものの、周りはないもなかった。まるで

多摩ニュータウンの近くにあるはるひ野駅だった。しかし、唯一の違いはそこにお寺があり、若い男の人たちが行ったり来たりしていることぐらいだった。

「いや、はるひのとは違う。こっちは大寺院が建っているのである。」

運転士はそういった。

「どうせ、ここには2時間止まるんだから見てくるほうがいい。」
運転士の発言にペナルティはびっくりした。

「二時間!!!!!!」

「そうだよ。みんな駅で止まる時間は2時間ってきまっているんだよ。万が一、駆け込み乗車してドアにはさまれたなんていわれたら、弘道裁判所で重罪になるからね。」

その言葉にペナルティは絶句した。東京ではドアを開けている時間など15秒あるかないかぐらいである。常識というものは、たまには非常識になるのである。

ともかくペナルティはせっかくなので駅を降りてみた。どんどんお寺のほうへ近づくとお経が聞こえた。しかし、そのお経は普通のお経とは一味もふた味も違った。

「萌えー。萌え。萌えー。萌えー。」

こんなお経を聞いていると噴出しそうになるが、まさかこんなところで笑うわけにも行かない。ペナルティは我慢しつつ、本殿の法へ向かった。

本殿には、仏像の代わりに一枚の少女の写真が飾られていた。そこに信者が頭をペコペコしているのだから、これほど笑えるものはない。

そして、信者たちがペナルティに気づいたらしくいきなり“萌えー”といいながら追いかけてきた。もうペナルティの中では「こんな駅モエエ」という感じである。

電車は海沿いのなかなかいいところを走っていた。車掌さんの気分よさそうに

「次は〴〵。阿駒島〴〵。阿駒島〴〵です。」

そして、急に列車は急カーブを渡り、橋を単独で渡り始めた。これこそ絶景というものである。ペナルティもうとれてしまうほどだった。

そして、列車は小さな駅、阿駒島に到着した。当然、ここでも2時間止まるのである。

ペナルティはこの駅を降りてみた。さっきとは違い、この島には、南国情緒と穏やかな時間が流れていた。

透き通る海。

それはペナルティをとりこにさせてしまうようなぐらいきれいだった。

ふと、島を歩いていると海沿いに一軒の家を見つけた。

そこは、廃墟になりかけていた。しかし、まだ人はいるようだ。

ペナルティはまだ食事を取っていないだったのでその家で食事を取らせてもらうことにした。

訪ねてみるとそこは診療所だった。中からここの医者である人が出てきた。

「こんにちは。」

それにペナルティが訪ねた。

「すいません。朝食をいただいていいですか。」

それに医者は了解してくれた。そして、朝食と一緒にとることになった。

「どこから来たのかね。」

老人となった医者はゆっくりと準備をしていた。

「いや、ちよと。」

「電車にのってきたのかね。」

「はい。」

「それは大変だな。ここで列車を逃したら2週間は電車がこない。まあ、貨物は一本は止まるが・・・。」

それにペナルティは驚いた。そして、老人は話を続けた。

「実は、この列車が一週間に一本しかこないことから診療所がここにできたんだが、私は、この一代目の医者なんだよ。しかし、もう私も年をとっている。こんなところに医者が来てくれることはないだろう。」

老人は顔をしかめた。ペナルティはこの島のことについて聞いた。

「実はこの島に鉄道を通すきっかけになったのが、あの岬に台風によって定期船がぶつかり、全員死亡したということからだ。ここら辺の海の構造は不思議な構造になっているのでね。そして、鉄道が完成した。しかし、船よりも使えないな。鉄道は。」

その話にペナルティはこの島の歴史を感じた。しかし、そこまでゆっくり出来なかった。時間ははやくすぎていくものである。駅で老人に送られ、さらに先にペナルティは進んだ。

Ⅱ第9話 巨大な町に潜む悪Ⅱ

海を渡るとトンネルに入った。しかし、なかなか出口が見えない。このまま、マグマにぶつからないだろうか。そんな心配をしていると運転士が言った。

「このトンネルは、灰汁沢峠といって、昔は、この峠で死んだ旅人が何人もいたんだよ。しかし、鉄道が開通してからはそんな人も消えたけどね。」

それにペナルティは納得した。そして、運転士に島で聞いた話を聞いた。

そんなこんなの中にトンネルを抜けた。そこには町が広がっていた。

「まもなく、向ヶ丘、向ヶ丘です。」

町といってもそこの地方都市とは比べほどにならないくらい大き

い。

しかし、今までの町とは違っていた。

人々はなんだか殺気を帯びていた。

人々は普通の生活を送ってはいいる。しかし、ペナルティにはそう思えた。

そんなことをペナルティが町の中を歩きながら思っていた時、殺気がこの町にあふれていることを象徴するようなことが起きていた。

それは、少年が別の少年たちからいじめられていたことである。

少年は別の少年たちからこんなことを言われていた。

「おい、ゴミ。さっさとどっかに逝っちまえ。」

そして、少年が立ち上がるとうするとまたグループの奴らはこう言った。

「おう、ゴミが自分から処分場に向かおうとしている。」

そして、少年たちは笑った。ペナルティにはそれが見るに耐えなかった。

「何をやってるんだ。」

ペナルティに気づいた少年グループが言った。

「はあ。ただゴミを説得してるだけだが。」

「あの少年はごみなんかじゃない。」

そして、ペナルティが拳を振った。

「やるのか。」

少年グループもやり返そうとした。しかし、そのとき、いじめられた少年が叫んだ。

「やめてくれ。」

そして、その少年は逃げていった。それをペナルティが後を追いかける。そして、少年を路地裏で捕まえた。

Ⅱ第10話 極度のいじめⅡ

ペナルティは少年から話を聞き始めた。

少年はこう言った。

「僕は、どうせごみなんだ。さっさと消えなきゃいけない存在なんだよ。」

「そんなことはないよ。」

「いや、きつとそうなんだ。」

ペナルティはこのままでは、少年の心の中にある闇を取り払えないと思った。そして、いい方法はないか思っていた。

「そういえば、もうそろそろ電車行っちゃうな。」

ペナルティがボソツと言った言葉に少年は驚いた。

「どこから来た？」

少年の発言にペナルティは困った。大体、列車に乗ったら変な世界に行ってしまった。

しかし、ペナルティは言った。

「ずっと向こうの町。」

なんだかっこいいが、ただぼかしたただけだ。

「そうなんだ。なに、旅？」

「うん。ちよつとある人に薦められてね。」

それに少年はやつといじめの話をし始めた。

「そうなんだ。僕も、旅に出れば、新しい人生が見つけれられるかもしれないな。なんで僕は助けてもらったのにこんなことをしちゃったんだろう。僕は、手のつけられないほどいじめられていたのに。あいつらはなんとも思っていないが、僕はとてもいやだった。まるで、奴隷のようだった。しかし、みんなは助けてくれない。どんどん、エスカレートしていくだけだった。ズボン脱がしや掃除当番をすべて任かされたり。ほんと、なんだか初めて、君のような人に出会った。」

少年は、やつとペナルティに心を開いてくれた。

そんな時だった。ペナルティたちを突如揺れが襲った。

「大丈夫か。」

ペナルティは少年に声をかけた。それに少年はうなずいた。しかし、

この後、二人を引き離すようなことが起きようとしていた。
津波は、もうあの島を襲っていた。皆、誰もかも流されていった。
あの美しい風景は消えた。そして、津波は、鉄道のトンネルに流れ
込んだ。そして、ペナルティのいる町に向かっていった。

ペナルティ5－2（第11話～第20話）

Ⅱ第11話 大津波Ⅱ

そのころ、町では大変なことになっていた。

「津波が来るだって。」

町役場の空気が凍った。

「あと何分でくるんだ。」

それに電話の向こうにいる気象省の担当役人はこう言った。

「残念ながら、あと3分です。」

それを聞いた町役場の人は、急いで防災無線を手にした。そして、町の人に呼びかけた。

「あと三分で津波が来ます。」

それは町中に響いた。ペナルティたちもそれを聞いた。

ちょうどペナルティたちは高台にいた。

「ここなら、大丈夫だ。」

ペナルティは少年に言った。前、津波が来た時には、高台にいれば大丈夫だとニュースキャスターが言っていた。

そして、ペナルティたちがのほほんとしていると、津波がトンネルを伝って流れ始めた。

どうやら、町の人はなんとか高台に避難しようだ。

この町は、狭い上に、ほとんどの家が高台に建っている。そのため、避難しなくても大丈夫なのだ。

しかし、津波はどんどん流れてきた。そして、水位もどんどん上がってきた。

そして、なんと、高台までも飲み込み始めた。

ペナルティは少年に叫んだ。しかし、もう手遅れだった。ペナルティも一緒に津波に飲み込まれた。

ペナルティはもがきながら少年のことを思った。

しかし、ペナルティの気は遠くなっていった。そして、ペナルティは津波の中で気を失った。

気がつくと、そこは自分家の自分の部屋だった。

「気がついたか。」

そこには李さんがいた。片手にはノートパソコンを持っている。

「いや、いいね。新しいOSは。」

今までの出来事は実は李の仕業だったのだ。どうやら李は、ゲームを作ることが趣味らしい。

「今のゲームだったんですか。」

ペナルティは、李に怒り口調で言った。

「御免。」

李は謝った。そして、李はペナルティにあることを言い始めた。

Ⅱ第12話 虚実Ⅱ

ペナルティは言った。

「じゃあ、今までののはすべて架空なんですね。」

それに李はこう答えた。

「確かにすべてとは言わないが、架空である。しかし、また誰かが動き始めているのは本当だ。そして、それが近づいている。」

ペナルティは凍った。

その頃、相川と川崎は未来に来ていた。（その頃とは言わないじゃないか。）

未来にある ある店に来ていたその名は

「あるあるよ」

という店だった。

店に入ると、まず目を引くのはハブたち。どうやら南国からもってきたらしい。これこそ悪趣味である。

しかもその隣にはハブ酒とこれも悪趣味である。（石垣島ではハブ酒が有名なんだとか。）

川崎と相川がそこを通り抜け、店員に言った。

「すいません。調剤はどこですか。」

店員は、川崎たちを連れてさらに奥へ進んだ。

奥にはおじいさんらしき人がいた。そして、おじいさんは言った。

「いらっしやい。」

それと共に頭につけていたカツラがとんだ。

何もなかったように相川は言った。

「人々を混乱させる薬がほしい！！ファイヤー。」

なぜか相川が狂い始めた。もしかすると、粉薬の影響だろうか。そして、相川は何かを歌い始めた。

「♪フルスピードで回り始めた学校。赤く教室染め上げる・・・（何を考えているのやら。）」

そして、4分25秒後（一体、何の曲だよー。）おじいさんがやっとかツラを元の場所に戻し、薬を出してきた。

「♪昨日開発したぜベイベ。」

今度はおじいさんが1分51秒歌った。（これは音楽担当は大変だ。だって、探すのどうすんの。）ついでにおじいさんが言いたかったのは、音楽をこの世から奪い、玉にってしまうという薬だった。しかし、そんなことを歌われても相川たちには分からない。やっばり、この薬局はおかしかった。

そして、相川たちはその薬と、散布装置を持って元の世界に戻った。

Ⅱ第13話 曲玉Ⅱ

現代に戻った川崎と相川は早速、東京タワーに登った。

「そこにいるのは誰だ。」

警備員の声を見捨て、二人は急いで、機械を取り付けた。

今日の風は最高だった。

風速 5 m。

風向き 東南東

天気 開成

という天気だった。（なんだか天気が違っているような。このままじゃみんな頭よくなるぞ）

そして、ついに粉を飛ばす時がきた。

「OPEN THE DOOR。ファイヤー」

そして、粉たちは飛んで 飛んでいった。

その頃新宿。

コバ 幸男は小田急新宿駅のある階段で歌を歌っていた。

しかし、新宿に粉が到達した瞬間、歌の歌詞が思い出せなくなった。

そして、人々は何もなかったように歌は消え去った。

その頃、二子多摩川。

多摩川の底には玉が落ちていた。それは曲玉だった。

曲玉は、透明なもので、ビー球にも見える。しかし、それを手に取ると歌が聞こえるのである。

その頃、20XX年（もういろいろ世界が変わりまくって、このまま行くと、俺の頭が爆発するぞ。）。

熱斗のところにある男が来ていた。李さんだった。李は早速熱斗に言った。

「ペナルティのいる世界を助けてくれ。」

それに熱斗は困った。なぜなら、明日、小テストがあるからである。

それに感づいた李はこう言った。

「別に、熱斗の音楽のテストが悪くてもいい。でも、ペナルティの世界で音楽が必修できないと、大学はどこも生かせてくれないんだ。」

それに熱斗は心打たれた。ペナルティは頭が良かった。

だから熱斗は応援したかったのだ。音楽のためだけにペナルティの人生を変えたくない。

その思いがひとつになったとき、熱斗は李と一緒に行くこととなった。（なんだか、日本語おかしいです。）

その頃、ペナルティはこれから起こることを想像していた。しかし、ペナルティはそんなに問題にならないだろうと思っていた。しかし・
・・・

Ⅱ第14話 美少女の影？Ⅱ

川崎の耳に熱斗たちが動いているという情報が届いたのは、李がちように熱斗を説得していたときである。

あの店の主人からだった。店の主人は、熱斗たちを警戒していた。今までに起きていたことを隅々まで知っていたからだ。

それを聞いた川崎は、相川に言った。

「入り鉄砲に出女。」

これは江戸時代に江戸に入る男を検問する時と江戸から出る女を検問する時の合言葉だ。

それは川崎が相川に熱斗を殺せという暗号だったのだ。

川崎たちはこんなにも計画を立てていたのだ。

それを李はペナルティの世界に来て初めて気がついた。

「熱斗。」

熱斗をつれて裏路地へ逃げていった。

そして、人目につかないところにきて李は言った。

「どうやら作戦が漏れたらしい。変装するぞ。」

そして、どこからともなくゴムで作られた着物を頭からかぶった。

また元の道に戻ると、さっきの男がいた。しかし、さっきの男はなぜか熱斗を見て興奮している。

そんなことを気にしている場合ではなかった。

そして、ペナルティの家に着いた。インターホンで対応したのはペ

ナルティの母であったのだが、インターホンに写った二人に悲鳴を上げた。

「どうした？」

ペナルティが下に下りてみるとそこには水商売風の少女が二人いた。

ペナルティも啞然とした。

「どうも、ある人から頼まれてきたの。」

李はまるで女みたいな声を出した。それに熱斗が笑ってしまった。

「熱斗？」

そして、二人は人工的につくった着物を脱いだ。

しかし、ペナルティは啞然としてしまっていた。それもそのはずだ。

熱斗は自分が着ていたものを見て驚いた。それは水商売風の女のやつだったからだ。そんなの少し見ていたら、絶対はかないだろうに・・・。

そんなこんなでペナルティたちは二階のペナルティに部屋に上がっていった。

そこで、今後の話し合いをするのだが・・・。

Ⅱ第15話 謎の少年と外国人Ⅱ

ペナルティたちが話し合いをしている頃、土屋国際空港に謎の少年がいた。

その少年は、名を東小金井といった。なぜそれが分かるか。それは、少年が逆回転しながら、「ちゅ、ちゅちゅちゅ。私は東小金井でちゅちゅちゅ。」

と名前を明かしていたからである。

しかし、なぜ少年は誰を待っていたのだろうか。

そして、ある飛行機が到着した。

その飛行機に乗ってきた男の人は、そのまま、到着ロビーにいる東

小金井のところへ向かった。

「H A L O Mr. Higasaki gane i.」

それに東小金井も英語で応対した。

そして二人は、そのまま浦安鉄筋ランドへ向かっていった。

ペナルティと熱斗が話してあっているとき、ペナルティの母がノックした。

「誰かいるの。」

それにペナルティは焦った。そして、熱斗を押入れに急いで押し込んだ。

「手紙。」

ペナルティの母が差し出した手紙をペナルティは受け取った。

ペナルティの母が部屋を出た後、さっき押入れに収納した熱斗に出した。

そして、熱斗と手紙を見た。そこには不幸の手紙と書いてあった。

「これまわさなきゃいけないのかな。」

ペナルティはひそかにつぶやいて中をあけた。

そこには

「これは回すな危険。そして、二人に連絡、今日、3時に新葛南駅に集合。」

とかがれてあった。

「新葛南に3時？」

ペナルティは時計を見た。

「今、午後2時？」

そして、急いでペナルティたちは外へ飛び出した。熱斗も後をついていく。

「あら。」

ペナルティの母はペナルティが飛び出していくのを不思議がったが、すぐに忘れていった。

そして、ペナルティたちは新葛南へ向かった。

「新葛南。新葛南です。」

ペナルティたちはなんとか新葛南についた。しかし、ここは浦安鉄筋ランドの最寄り駅ではない。

ペナルティたちはこれからどうなるのか少し不安だった。

Ⅱ第16話 東小金井Ⅱ

新葛南は、南口が海に面しているため、南口には何もなかった。

ペナルティたちは、指定された場所にいた。

そして、午後3時。

「誰もこないじゃん。」

熱斗が言ったとき、後ろに置かれていたブルドーザーが動き始めた。

「後ろ。」

ペナルティに言われて気づいた熱斗はペナルティと一緒に逃げた。

しかし、すぐにブルドーザーは止まった。

「君たち。よ♪う♪こ♪さ♪ん♪日本へ」

そして、なぜか東小金井が泊まっていたホテルに連れて行かれた。

しかし、浦安鉄筋ランドの周りだというのに、ホテル内には家族ずれは居らず、若い男女が出入りするホテルだった。

「どういうケチり方だよ」

ペナルティはそう言った。

「ここが、俺たちが泊まってる部屋だす。」

そして、ペナルティと熱斗は東小金井たちの部屋に呼ばれた。

部屋と云ったって、ただベッドがおかれているだけである。まるで昔に來ているような話だが、ケチっているとしかいえない。

「なんで僕たちをここによびだしたんですか。」

ペナルティは聞いた。そこに熱斗が横から口をはさんで

「それに、なんでこんなところに泊まっているんだ。」

と云ってしまった。

「お前だって、そのうち使うだろ。」

外国人は熱斗にはき捨てるように言った。そして、ペナルティのほうをむくところいった。

「理由は君たちにもわかっているだろう。そう歌がこの世の中から消えたのだ。だから人々は浦安鉄筋ランドにも来なくなり、このホテルも若い男女が出入りするだけになった……。」

「……このホテルはもとから家族連れなんてきやしない。」

熱斗はさらに余計なことを言う。ついに外国人からも無視された。ペナルティはあることに気がついた。それは、外国人がさっき歌を歌っていたことだ。

「なんで歌を歌えたのですか。」

ペナルティの問いに外国人は答えた。

「それは俺が超バカだからだよ。」

Ⅱ第17話 十人十色Ⅱ

外国人の言葉に何もいえなくなってしまった。

「この薬は馬鹿には効かないんだよ。」

それにペナルティはやっと聞いた。

「なぜ馬鹿だと決め付けるんですか。」

それに外国人は答えた。

「僕は、馬鹿のことで人を殺してしまった。」

そして、外国人は続けた。

「それは私の恋人でした。しかし、私が殴り殺してしまった。しかも精神がおかしくなって。」

そして、外国人は泣き崩れた。ペナルティたちは何もいえなかった。いや、もう何がなんだか分からなかった。

その頃、相川たちが想像したとおり、精神がおかしくなっていた人がいた。

「あー。」

そして、パソコンへ向かうと、すぐに何かを打ち始めた。それはプログラムだった。

そして、男はあっというまに打ってしまった。

ペナルティたちは、気を取り直し、これからの対策をたてることにした。

しかし、これから何が起きるか想像もつかなかった。

そして、一回解散することにした。もう夜もくれていた。家に帰るとペナルティの母は心配していた。

そして、2階に上がり、ペナルティたちは寝ることにした。

次の日、ペナルティが熱斗よりも早く目が覚めた。

理由としては、熱斗に蹴っ飛ばされたからではあるのだが……。居間にあるテレビをつけると、どこの番組もニュースだった。しかも、インターネットにアクセスできないというのだ。

「これは大変だ。」

ペナルティは急いで、二階に上がると熱斗を起こした。

熱斗は眠そうにしながらも、起きた。そして、ペナルティと熱斗は、学校のパソコン室へ向かった。

そして、熱斗はロックマンをネット上にプラグインをした。

ネット上はウイルスたちによって占拠されていた。

そして、ロックマンと熱斗はウイルス退治を始めた。

Ⅱ第18話 異次元Ⅱ

しかし、いくら退治してもウイルスは出てくるばかりだった。

「これじゃあ、きりがない。」

熱斗は悩んだ。

その時、誰かが、パソコン室に入ってきた。それは、東小金井だった。

そして、東小金井は言った。

「もうだめだ。いくら倒しても、意味がない。」

「何を言ってるんだ。俺とロックマンなら……。」

熱斗が言っている最中にまた誰かが入ってきた。それは、梅園先生だった。

「どうしたんですか。」

梅園先生の姿にペナルティたちは驚いた。

「実は、ここへくる為に、いろいろとやったんだ。しかし。着いてみたら。あら。」「力抜く」そこには、怖いお兄さんたちがうじゃうじゃ。そして、「目の前の黒板をたたく」俺は、ぼこぼこにされたんや。しかし、なんだか、虫型人間が現れて、助けてくれたのよ。」

ペナルティと熱斗は梅園先生の言っていることが少し分からなかった。

東小金井がぼつりと言った。

「この人が言いたいのは、ただ、自分が襲われたということが言いたいだけなんです。もう時間がない。」

そういうと、いきなり異次元空間が口を広げた。

そして、熱斗たちは、謎の世界へと吸い込まれていった。

熱斗が気づくと、そこは、森の中だった。周りに、ペナルティたちの姿はなかった。

その代わりといっては何だが、少年が一人いた。

「目を覚ましたか。」

少年は熱斗に声をかけた。

「うん。ところで、ここは、」

熱斗が聞くと、少年は驚いた顔をした。

「なんだい、君はここを知らないのかい。ここは、この地区では恐れられている場所だというのに……。」

そして、少年は言った。

「ここは、死人の森さ。昔、危機が起きた時に、人々が逃げた森な

のだが、その人たちは皆死んでしまった。その霊がこの森に出るといわれている。」

そして、少年は駆け出した。

「こんな不気味なところにいたってしょうがない。近くにある僕のテントにおいでよ。」

Ⅱ第19話 荒れ狂う世界Ⅱ

「ヘクション。」

熱斗はくしゃみをした。

「大丈夫か。はい。」

少年は、熱斗にミルクを持ってきた。

「ありがとう。」

そして、少年は言った。

「あしたにでもここを離れるか。」

「一体、どういうこと。君はここに住んでいるんじゃない……」

「いや、僕は、国から追いかけてられているんだ。」

少年の言葉に、熱斗は驚いた。少年は話を続けた。

「この世界は、もうだめなんだ。何もかもが。」

「それって、どういうこと。」

熱斗が少年に聞いた。

「僕は実は、兵役で宇宙へ行っている年なんだ。」

「宇宙？」

熱斗は空を見上げた。

「ああ、今、世界は、宇宙と、地上で紛争を起こしている。」

熱斗は少し驚いた。そして言った。

「しかし、なんで逃げ出したの。」

「それは、僕を国は殺そうとしたからだよ。」

それに熱斗はさらに驚いた。

そして、少年は、さらに話を続けた。

「この国では、子供が生まれて、そして、小学校5年のときに、兵軍学校というところで、男子はある試験を受ける。それは、軍隊入団。男なら、誰もが逃げられないものだった。そこでは、体力・病気診断を行った。ここまでは普通なのだが・・・」

少年は泣き始めた。熱斗は、少年を抱いた。

「大丈夫。俺と一緒にいこう。」

それに少年はうなづいた。すこしたった頃、まだ少年は口を開いた。

「僕は、友達をなくした。なぜなら、その試験に合格できなかったものは、夢の国というところに連れて行かされる。そして、そこで厳しい労働が待っているんだ。食事もらえずに、ただ一日中、働かされる。そして、皆だんだん力がなくなり、亡くなっていくんだ。」

「そうなのか。」

熱斗は話を聞き終わると、少し黙ってしまった。

「この国によって、少年たちが困ったことになっている。助けなくちゃ。」

そういう心が芽生え始めた。それと同時に夜が明けようとしていた。

Ⅱ第20話 移動Ⅱ

そして、朝が来た。熱斗は、朝から、少年と一緒にテントを片付けたりしていた。

少年が言った。

「僕は、一人でも大丈夫だ。別について来なくても・・・」

「いや、別にいいよ。国の人がかわいそうだから。」

熱斗はそう少年に答えた。

そして、熱斗と少年はその場所を後にしようとしていた。

「忘れ物はないな。」

少年はあたりをみまわして、自分のものが落ちていないか確認をした。

「そういえば、自己紹介、まだだったね。僕は、順平。」

「俺は熱斗。」

そして、順平と熱斗はそこを後にした。

「昨日はありがとう。」

順平は言った。

「いや。僕のほうこそありがとう」

と、熱斗は返事をした。

「そういえば、それ何？」

順平は、熱斗のP E Tを指差した。

「ああ、これはP E Tって言って・・・」

「こんにちは、順平君。」

P E Tからの声に順平はびっくりした。

「だめじゃないか。ロックマン。」

熱斗は、ロックマンを怒った。

「そういえば、もしかして、これと同じ？」

順平は、持っていた機械を取り出した。それはビョンドードでみた機械に似ていた。そして、中から声がした。

「順平、おいらを呼んだか。」

それはまさしくナビの声だった。

「いいや。新しい友達ができたからさ。」

「なんだ。また友達を作ったのか。でも、友達なんていらないじゃないか。また、国に捕まって、殺されてしまうのが落ちだ。」

そういうと、ナビは、応答しなくなった。

「まったくもう。」

順平はあきれた顔をした。

「そういえば、順平はどこに向かっているんだい。」

「それは、第二の都市、カスパさ。」

「順平はそんなところ行って大丈夫なのか？」

熱斗の間に、順平はうなずいた。そして、地平線のかなたから町が見えてきた。
それがカスパだった。これから一体どんなことがおこるのであろうか。

ペナルティ5－3（第21話～第30話）

Ⅱ第21話 遺跡の中でⅡ

カスパの町の前には、検問があった。

「あれ、こんなところに検問なんてあったかな。」

そんなことをいううちに、検問所の職員がきた。

「その少年。ちょっと。」

それは熱斗にかけられたものだった。

「あっ。」

順平が気づいた時には遅かった。

順平は、変装していたので、なんとか捕まらなかったか、背も少し高い熱斗は、あっけなく職員に連れて行かれてしまった。

ところでペナルティと梅園先生は、どこへ行ってしまったのだろうか。

ペナルティたちはある遺跡の中にいた。

そして、二人は気がついた。

「いたた。ここはどこだ。」

梅園先生はあたりを見回して、驚いた。

「ほ、骨が。」

ペナルティが振り向くとそこには、白骨化した遺体があった。

「うわっ」

ペナルティもその光景に思わず、目を閉じた。しかし、すぐに目をあけた。いや、あけなければ物事が解決しないようにおもえたのだ。

「どうやら、昔の人ではないようだ。」

梅園先生はいった。服装が現代人そっくりだった。

「じゃあ、一体。」

その時だった。

「誰かそこにいるのか。」

その声にペナルティたちはあわてて、入り口を通り抜けた。

「そこで何をやっていたんだ。」

その声はおじいさんだった。

「はあ。」

梅園先生はため息をついた。ペナルティはおじいさんに答えた。

「実は、道に迷って、ここにたどり着いたんです。」

その答えにおじいさんは笑った。

「ははは。気をつけないと、この遺跡に長時間いると、有害な成分によって、体が動かなくなってしまうぞ。」

そして、3人は遺跡を出た。

歩いているとおじいさんが言った。

「そういえば、君たちは旅人かね。」

それにペナルティはうなづいた。

「そうか、大の男が二人歩いていては大変だ。なんせ、この国は今、大人は、研究者以外、皆、軍地へ行っている。」

「それってどういうことですか。」

ペナルティはそう聞いた。

Ⅱ第22話 研究者Ⅱ

「私は、カSPAという町の研究者で、昭二って言うんだ。そういえば、自己紹介、わすれつつたわ。ははは。ところで、おぬしたちは、一体、どこから来たんだ。まあ、そんなことを聞く必要はない。この世界が今、戦場と化している。しかも、北から南までだ。さらには、今、宇宙からも攻撃を仕掛けられている。」

その話にペナルティたちは哑然となった。

「そういえば、君たちはもう、軍に入団しなければいけない年齢と同じだ。私が、研究者としてかばってあげよう。」

そして、歩いていると町が見えた。

「あそこか、カSPAだよ。」

その町の前には、あの検問所が待ち構えていた。

「そいつらは、誰だ。」

それに、昭二が答えた。

「私の研究を見たいと言った別の町の研究者だよ。別に危険な人物ではない。」

それに警備員は3人を中に通した。

カスパの町は栄えていた。中では、威勢のいいおばさんやおじさんが商品を売っていた。

「ここが私の屋敷だ。」

昭二が案内した家は、世田谷の豪邸とまではいわないが、カスパの町の中では一際大きかった。

家の中に入ると、昭二は言った。

「そういえば、まだ、全部を話終わっていないなかったな。」

昭二は、堰を切ったようにまた話を始めた。

「さっきの検問所みたいに、この国は、防犯に厳しい。いや。他の国もこのくらい厳しいがな。君たちはこんなに厳しい警戒を見たことはないだろう。君たちは別の空間からきたのだからな。」

それにペナルティたちは驚いた。

「なぜ、そのことを分かったのですか。」

それに昭二は言った。

「あそこの遺跡には、昔、別の空間から来たという人が何度も降り立ったという記録があるのじゃ。だから、あそこの遺跡は、今でも、国の人たちに神聖な場所とされているのだよ。」

そして、昭二は世界で起こっていることに話を戻した。

Ⅱ第23話 直面する危機Ⅱ

「最初に始めたのは、誰だかわからないのだが、この戦争は複雑怪奇である。途中から宇宙人がやってきて、この地球を攻撃したのだ。しかも、その直前には、殺し屋集団が世界を駆け回るようになった。

このままでは、この空間はなくなってしまいうだろ。現在だってそうだ。少年たちまでもが、軍に行ってしまう、子供がなかなか生まれなくなった。国は、少年たちから、精子をもらい、それを人工繁殖しているが、今は、皆が生きるのに必死で、子供など作っている余裕などない。だから、さらに子供が減っているのである。」

その場の空気は静まり返った。この国の直面する危機にペナルティたちは何もいえなかった。

そのころ、熱斗は町の警察機関に捕まっていた。

「危なかった。もしも反乱や強盗を起こされたらたまったもんじゃない。」

警官は熱斗にはき捨てるように言った。

「さて、じゃあ、軍人権検査センターに送る準備ができたようだ。おい。こっちへ来い。」

そして、熱斗は黒いバンに乘せられ、軍人権検査センターに連れて行かれた。

軍人権検査センターは3階建てで、ちょっと古かった。今の日本と言うなら、昭和50年制と言ったほうが分かりやすいかもしれない。鉄筋コンクリート造り、外壁には茶色いタイルが貼られたビルだ。

そして、担当の職員は言った。

「すいませんが、ここに書いている用紙の順番でこれから、私と一緒ににまわっていきます。」

そして、熱斗と職員は、暗い廊下を歩いていった。

廊下の突き当たりには、体育館みたいなところがあった。まず、測ったのは、身長・体重（重くちゃあ、乗せられないもんな）・座高（高すぎちゃあ、乗れないもんな）・視力だった。

「では、身体能力行きますか。」

そして、腹筋・反復・短距離など、基本的な能力を測って行った。

熱斗たちはなんとか基本的な能力は測り終わった。

そして、次の日、結果が出た。

「すべての項目が出来ていますね。」

職員は熱斗にそう言った。しかし、このときはまだ平和だった。

そして、熱斗はカスパの町にある。役所の軍事課の課長のところへ連れて行かされた。

課長は言った。

「君を処罰する気は私にはないのだが、国からじきじきの命令があって、処罰を下さなければならぬ。前はこんなことなどなかったのに。」

そして、課長は言った。

「国からの罰則として、隣町ヒムラの科学施設にて、実験台として罪を償うこと。」

それを読み終わったあとの課長の顔は泣きそうだった。そして、熱斗にその令状が渡された。

「ごめんな。」

課長は熱斗に言った。熱斗の心の中には国への怒りと課長への悲しさが混ざった。

熱斗は言いたかった。しかし、この状況で言えるはずがなかった。課長は努力してくれたように思えた。しかし、こんな結果になってしまったのだと熱斗は認識した。

そして、熱斗が発言をしないうちにまた黒いバンに乗せられ、カスパを後にした。

「熱斗どうしたんだろう。」

ペナルティたちは日々の生活の中でそう思っていた。

そして、急に事態は急変した。昭二がある日こんな話を持ちかけられたというのだ。

それは、国の役人からだった。

「昭二さん。ちょっとお時間いいですか。」

それに昭二は返事をした。

「実は、ヒムラで、人間を製造するための機械を作ろうとしているんです。」

役人が話したことに昭二は驚いた。

「一体・・・」

昭二は科学の進歩かと思ったが、役人はさらに言った。

「もしかすると、昭二さんが思っていることと違うと思いますので、その設計図をお渡しします。」

そして、昭二に設計図が渡されて、それを見た。そこにはなぜか人間が入るところがあった。

「これは・・・」

それを言おうとした時、役人はもういなくなっていた。

Ⅱ第25話 熱斗を救うためにⅡ

そして、カスパの町の中では、ある少年が捕まって、この機械に入られることが噂になっていた。

そういう情報はペナルティたちの耳に入っていた。そして、昭二にあることを話そうとした。

夕食のとき、ペナルティは昭二に話しかけた。

「実は、私たちは、一人の少年とはぐれてしまったんです。」
それに昭二は驚いた。昭二は聞いた。

「それで、町で噂になっている少年を助け出したいというのか。」
昭二は分かっていた。機械に入れられるのはその少年だということを。

「分かった。君たちが会いたい少年かは分からないが、きっと助け出そう。こんなことはあってはならん。」

昭二は、次の日、あの役人のところへ行った。

「参加させてください。」

その言葉に役人は喜んだ。昭二は、国の中で優秀なのだ。

そして、役人は言った。

「では、案内を自宅に送付します。それをご覧になってからお越しください。」

順平も町の噂を聞いていた。そして、警察の前で、ひそかに黒いバンに忍び込んだ。

なぜか、バンには大きな箱があった。多分、捜査用に使うのだろう。順平はその中に隠れていたのだ。

バンは、砂漠地帯を通り、隣の町、ヒムラに着いた。そして、熱斗は研究施設の地下室に放りこまれた。

地下室にはもう一人、少女がいた。熱斗は声をかけた。

「やあ。」

それに少女は返事ひとつ返さなかった。

熱斗は退屈な時間をすごした。なんと、食事もでないのである。しかも、少女はぜんぜん反応しなかった。そして、いつのまにか夜になっていた。熱斗はやることがないので、寝ることにした。コンクリートの床の上に無理矢理寝た。コンクリートの床は冷たいが、布団などいいものはなかった。

熱斗は夢の中で見知らぬ少女と出会った。あの少女ではない。見たことのないような少女だった。

Ⅱ第26話 死神の少女Ⅱ

その少女は、熱斗に話しかけた。

「もうすぐ。私の出番のようね。その前に仲良くしようね。」

そして、熱斗のほほにキスをした。それに熱斗は驚きと変な感触を覚えた。

まさか、いきなり夢の中でキスされるとは・・・。

こんなことをメールが知ったらさぞ、泣くことだろう。

しかし、再び熱斗は不思議な気持ちになった。あの少女はという思

いだった。別に恋とかそういうものではない。ただ、熱斗には少女の発言が気になっただけだった。

その少女は目の前で熱斗を見つめている。そして、声をかけた。「びっくりさせちゃったみたいね。でも、私、恋しちやいそう。今までこんなかわいい少年を連れてってなんかいないもん。」

熱斗はさらに心がうずうずしてきた。思春期っていうのはそういうものなのであろう。

しかし、連れて行くという言葉引がかかって、ついに少女に聞いた。「ねえ、一体、僕をどこに連れて行くの。」

それに少女は怖い顔をしていった。

「それは、死後の世界よ。」

それに驚いた熱斗は目を覚ました。もう朝だった。そして、奥にいた少女は冷めた目で言った。

「あなたって、これから何されるか分からないのによくのんきに寝てられるわね。それに昨日だって、よくまあ、話しかける勇氣があったものね。誰か助けにでも来てくれるの。幼稚園児でも。」

「いや、別に。」

熱斗はペナルティたちのことを思った。ペナルティたちは今どうしているだろうか。そして、助けに来てくれないだろうか。

そして、ついに研究所の職員に誘導されて、検査室に呼ばれた。そこで、最終的な検査を行い、それから機械の中へ入れ、そして、医師によって、脳を停止した状態で生殖できるようにするという流れだ。つまり、ここを過ぎれば、あの少女と一緒にあの世へ行かなければならなくなるのだ。そして、検査は始まった。

Ⅱ第27話 熱斗奪い返し大作戦Ⅱ

ペナルティたちは研究所の前にいた。そして、門の前に怪しい少年がいた。

「君は、だれ。」

ペナルティは聞いた。それに少年は驚いた。

その少年とは、良平だった。

「僕は、熱斗を助けに来たんだ。」

それにペナルティたちは驚いた。

「僕たちもだよ。いい方法があるんだ。一緒にてつだってくれないか。」

そして、ペナルティたちは仲間を増やして、研究所に入った。入ったところで、警備員に捕まった。

「君たちは、何の用事でここに来たんだ。」

それに先に行っていた昭二が警備員に言った。

「私の助手で、ぜひともこの研究に参加したいと言って来たんだ。」

「しかし。」

警備員が困っているところに、この研究所の所長らしき人物が現れてこう言った。

「いいじゃないか。こんな経験は若い助手には経験できない。是非とも参加して、学んでいってくれ。昭二さんの助手なんて、とても優秀なんだろうな・・・。」

そして、ペナルティたちはゲートを通り抜けた。人気のないところに行くと言った昭二が言った。

「よく、通れたな。」

「いや、昭二さんのおかげですよ。」

ペナルティはそう言った。

そして、昭二は、熱斗にいる控え室へと連れて行った。

「ここに少年はいる。」

そして、ドアを開けた。

「誰よ。」

そこには白衣をきた美女が立っていた。

そしてペナルティはそばにいた熱斗に言った。

「熱斗なんか、美女に鼻の下でも伸ばしてろ。」

ペナルティはその場から逃げ去ってしまった。

「ごめんな。熱斗。さあ、逃げよう。」

そして、おいていかれた梅園先生たちは熱斗と一緒に逃げた。

「待て。」

警備員は、4人を追いかけた。しかし、研究所を飛び出して、しばらく走っていると警備員はいなくなつた。

町の検問を通り越して、砂漠地帯を歩いていった。そして、砂漠のど真ん中にオアシスが見えた。

「もしかするとペナルティはあそこにいるかもしれない。」

昭二はそう言った。

Ⅱ第28話 オアシスⅡ

そして、オアシスに來ると確かにペナルティは木陰の後ろにいた。

熱斗は急いでペナルティの前へ行つた。そして、頭を下げて言った。

「さっきはありがとう。」

しかし、ペナルティは下を向いたままだった。その状態が何分か続いていていた。

後ろでは、昭二と梅園先生が話していた。

「・・・ほんと、男なら一度は通る道なだけだな。」

「梅園さん。」

昭二は、梅園先生を静かにさせた。そして、やっとペナルティは口を開いた。

「いつから熱斗はそうなったんだ。前の熱斗のほうが好きだった。」

それに熱斗は困つた。自分ではそう思っていなかった。

梅園先生はついにペナルティに怒つた。

「別に、いいじゃん。男なら通る道なんだよ。ねえペナルティ。」

それにペナルティは言った。

「確かにそうかもしれない。しかし、熱斗だけにはなってほしくなかった。熱斗は、素直だからいいんだ。でも、なんだかだんだん素直さが無くなつていつているようにしか見えないんだ。」

熱斗はペナルティの言葉に何かを感じた。それは何か忘れていたものかもしれない。でもその正体は謎のままだった。

＜自分は何かが変わってしまったんだ。＞

熱斗の心の中をその言葉が飛び交った。

「ペナルティもいい加減にしないか。お前の気持ちだって分かるが・・・」

梅園先生が言ったが、熱斗が梅園先生を止めた。そして、ペナルティに言った。

「たしかに、何かおかしかったかもしれない。でも、俺にはわからないんだ。どこが変わってしまったのか。」

それにペナルティは言った。

「もしかすると、僕もおかしかったかもしれない。ごめん、こんな迷惑をかけて。梅園先生も。」

それに梅園先生は謝りたかった。梅園先生も自分で言いすぎたと思ったのだ。

「さあ、見つからないうちにどこかへ行かなければ。」

昭二が言った時、砂漠の中に少女が立っていた。

「あの子は、研究所の。」

熱斗は驚いた口調で言った。

Ⅱ第29話 貿易の町ムラヤⅡ

「さっきはありがとう。助けてくれて。」

少女はペナルティに言った。そして、少女は熱斗のほうを向いてこう言った。

「よかったわ。ほんとうに、あなたって、運がいいのね。」

それに熱斗は困った。別に運がいいわけではない。多分、こんなにいろいろなところでいろいろな相手と戦わなくてはいけないことが運がいいことなのだろうか。

そして、少女はあるところへと姿を消した。

ペナルティたちも、体制を整え、砂漠を歩き始めた。

二時間後、あの砂漠を越えた。

「ここは、もう他の国だ。たぶんあいつらも追いかけてはこれないだろう。」

昭二はそう言った。

「しかし、なぜ国境がないんですか。」

ペナルティは変な質問をした。たしかに国境には壁だの軍隊だのがある。しかし、今通ってきた道には軍隊などは一人もいなかった。

「それは、この国との貿易を事実上認めているからだよ。それに、この国は、平和主義国で、最低限の防衛しかしていないんだ。」

昭二は言った。

「平和主義国？」

ペナルティはすこし疑問に思った。前、昭二は地球上すべてで戦争が起こっているといった。当然、戦争を起こしたのは各国のほずである。その疑問を持ったまま、ムラヤの都市に入った。

ムラヤの町は今まで見てきた都市よりも大きかった。

町を歩いていると昭二は言った。

「これからどうするか。」

それに皆、何も思いつかなかった。そして、昭二は言った。

「じゃあ、わしの知り合いの研究所にお世話になるか。」

「そうしますか。」

梅園先生はそれに賛成した。どちらにしろ、今日はこの町に泊まらなければならない。

そして、町のはずれにある研究所についた。

「やあ、久しぶり。」

昭二に研究所から出てきた知人はこういった。

「ああ。今日はここに泊めてもらえないか。」

「ああ。いいが。」

ペナルティたちは何とか宿を獲得したのだった。

Ⅱ第30話 イオ国へ。決断Ⅱ

そして、知人は昭二に聞いた。

「まさか、研究所からまさか助け出したんじゃないだろうな。」

それに昭二はうなずいた。

「参ったことをしたもんだな。たしかに、人をあそこまでやるのはどうかと思うが、それよりもお前の名誉のほうが大切なのではないのか。」

「いや。そんなことはない。今、あの国は滅びかけている。戦争をしてなにがいいんだ。あのままでは国はどんやせ細ってしまうじゃないか。」

「しかし・・・」

食事を取っていたのに、その話でもちつきりになっていた。二人の研究者の考えは真っ二つに分かれていた。

そのころ、イオ国では、大変な大騒ぎになっていた。

国王の部下は言った。

「どうやら、昭二たちはザイ国に逃げたようです。」

「そうか。では、攻撃をはじめるとするか。」

「ちょっと待ってください。国王様。」

国王の発言に部下が待ったをかけた。

「そんな戦力を出すほどの兵力はありません。」

「そんなことはない。同盟を結んだ国に連絡しろ。」

部下は国王の前では無力だった。

何を言っても、最近は無理やり押し通された。

「最近の国王はどうしたものだろうか。」

廊下で、部下はため息をついた。今のイオ国では、表向きは国王に忠誠心を誓いつつも、裏ではこんな状況なのである。

そんなことを知ってか、知らぬかわからないが、知人はこんなことを言い始めた。

「ある商人から聞いたのだが、どうやら、今、イオ国は体力を消耗しているそうだ。そして、人々は、国王への忠誠心などがなくなっているそうだ。」

その情報に昭二は言った。

「そうか。ありがとう。」

知人はさらに付け加えた。

「しょうがない。応援してやる。ほしいものがあれば、言ってくれればよい。」

そして、大きな部屋にペナルティたちを集めた。

昭二は言った。

「食事の時に、私の知人は、協力してくれるといった。どうだ、国を再生させないか。平和な国に。」

それにペナルティたちはうなずいた。

ペナルティ5ー4（第31話〜第40話）（前書き）

お待たせいたしました。第31話から第40話です。今回から、一部、流星のロックマンというゲームおよびアニメ作品が入っています。

ペナルティ5－4（第31話～第40話）

Ⅱ第31話 見習いサンタの絶望Ⅱ

次の日、ペナルティたちは、ムラヤの町を出て、イオ国に入った。ペナルティたちは緊張した。もしかすると、殺されるかもしれない。しかし、自分たちには使命があった。

砂漠を歩いていると、砂漠のど真ん中に人がいた。

「もしかすると軍隊の奴かもしれない。」

昭二は言った。しかし、すぐに軍隊ではないことが分かった。服装が赤いのである。しかも、長袖、長ズボン。まるでサンタクロースのようだった。

近づいてみると、サンタだった。しかし、ペナルティたちが想像したあの長いひげのサンタではなく、若いサンタであった。

「どうしたんですか。」

ペナルティは、そのサンタに聞いた。サンタはこう答えた。

「もうだめなんです。何もかも。子供たちに届けようとしても、子供はどこかへ逃げていて、所在が分からない。さらには、サンタの中には、たまたま戦いに巻き込まれ、死んでいった仲間もいます。それで、私はサンタをやめようと。」

ペナルティたちは思った。そんなことはさせられなかった。

どうすれば、よいのだろうか。

そのころ、国王周辺は緊迫していた。

「なに、またここへ戻ってきそうだと。さっさと捕まえろ。軍隊を集めろ。殺してもいい。」

国王はもう大変なまでに狂気になっていた。それを誰も止めることは出来なかった。部下は指令した。

「はやく。はやく。軍隊を出せ。誰でもいい。早く」
国は、狂気に満ちてしまっていた。

ところで、武蔵小金井、失礼。東小金井はどうしたのだろうか。
東小金井は、このところ、ずっと消息を絶ったままだった。

ペナルティたちは、なぜだか、東小金井の存在を忘れていた。

東小金井は一体どこへ行ってしまったのだろうか。これがキーワードであることはまだ気づかされていなかった。そして、ペナルティたちは、サンタにあることを言った。それは、
「地球の戦争は絶対止めて見せます。」と。

Ⅱ第32話 死と・・・Ⅱ

無理やり組まれた軍隊たちは、ペナルティたちがいると思われる国境付近に配備された。

「怪しい人物を見かけたら、職務質問しろ。」

隊長は、威勢よく隊員に向かっていった。

そのころ、ペナルティたちも気づいていた。

「これでは、ここから動けない。どうする。戦うか」

ペナルティはみんなに聞いた。

「俺とロックマンがクロスフュージョンして、武器を壊していく。
その間に、逃げるのはどうだ。」

熱斗はそう言った。しかし、それではまたとらわれの身になって、
今度こそ、この世から消えてしまう。それだけは出来なかった。
しかし、熱斗は決断していた。たとえば、ここで死んでもいいと。

ペナルティたちの判断に熱斗はこう言った。

「俺はいい。それよりも、出来るだけ多くの人を助けることが大事
なんだ。俺は、もうここで死んでもいい。」
その言葉についてみんなついに動かされた。

熱斗は、久しぶりにロックマンとクロスフュージョンをした。

「敵がいるぞ。」

兵士の一人は、その姿に唾然となった。

「あれはなんだ。人間と何かが合体しているぞ。」

そして、熱斗は、兵士の武器を狙って攻撃をし始めた。兵士は殺せなかった。兵士だって、無理やりやらされているのである。そのことを思うだけで十分だった。

そのさなか、ペナルティたちは脱出した。しかし、その行動を見つけてしまった。

「全速力で逃げるぞ。」

梅園先生は、昭二を担いで逃げた。さすが、運動部の顧問だけある。しかし、良平は、あとすこしのところで兵士に捕まってしまった。

「良平。」

ペナルティは叫んだ。それに答えるように言った。

「先に逃げて。僕は大丈夫だから。」

「おい生意気な小僧だ。」

良平は兵士に連れて行かれてしまった。

ペナルティたちは逃げるしかなかった。

そして、ある村に着いた。そこには兵士はいなかった。

Ⅱ第33話 平和村Ⅱ

ペナルティたちは、村の人に聞いた。

「軍隊の人はいませんか。」

それに村民の一人はこう答えた。

「そんな危なっかしいもの入れるわけがない。」

そして、ペナルティは、村民に事情を話した。

「そうかい。じゃあ、一度長老に会ってみると良い。いろいろと教えてくれるだろう。たぶん、戦っている少年も時期こちらにくるだろう。」

村民の言葉に不思議さを感じながら、ペナルティたちは、長老の家へ向かった。

長老の家に着き、事情を話すとすぐにあってくれた。

「ようこそ。平和村へ。」

「平和村？」

ペナルティは思わず聞き返してしまった。平和という名前がつく村は、なかった。しかも漢字表記だ。

「ここは、ある人物が開いた村なのだよ。この村はね、あの王子を嫌がっているんだ。いま、国中の村が壊されている。あの政権によって。隣の国は、平和主義でいいが、こちらは、戦争を仕掛けてもいる。この村は、ちょうど砂漠の真ん中にある山にあるので、結構分かりやすい。あそこを見てみる。」

後ろに広がる独特の風景。山頂には風車が風を受けて回っている。まるで、別世界だ。どこかのお話に出てきそうだ。そして、老人は続けて言った。

「この地には、争いはないのだよ。そして、逃れた民もこちらへ来る。なぜだかだ。ただ、村も小さくて、収容しきれないから、他の所へ行ってもらっている。すまないが。しかし、今回は特別に泊まっていってよい。何日でも、」

その長老の言葉にペナルティは頭を下げた。

その頃、熱斗は、なんとか、兵士との戦いをまるく収めた。

そして、上空で、あの平和村を見つけた。

その時、ロックマンのヒットポイントがなくなってしまった。

「おー。」

熱斗は砂漠へ落ちていった。

「いたたたっ」

熱斗は怪我なしで済んだが、平和村へは歩いていかなければならなかった。まあ、これもこれでいいのだろう。

Ⅱ第34話 走れ！熱斗？Ⅱ

国王は、その頃、捕まった良平をどうするか決めていた。国王は、やはり頭がおかしくなったように言った。

「少年を、公開死刑に処せ。」

「しかし、少年ですよ。国王。」

「そこまでやらなければ、あの少年たちは出てはこない。」

国王の発言に部下たちは困ってしまった。少年を処せば、国民からの反感を買うことは分かっていた。

しかし、部下たちは国王に従った。そして、順平の死刑のための準備が始まった。

まずは、このことを発表することになった。そうすれば、出てくるに違いないと思ったからである。

村では、恒例であるテレビニュースを見る会が開かれていた。村民はテレビによって、情報を得るのである。

熱斗たちも見ていたが、そのうち信じられないものが映りはじめた。それは、良平の画像だった。そして、国王の部下が話を始めた。

「さあ、反抗勢力よ。もしも、明日までに軍に投降して出てこないのなら、この少年を公開処刑とする。」

その言葉を聞いた熱斗は外へ飛び出した。それをペナルティと梅園先生は追いかけた。

「おい待て。」

ペナルティはなんとか熱斗を捕まえた。

「良平を助けに・・・」

熱斗はそう言った。

「やはり、そうだったか。」

長老が出てきた。そして、長老は熱斗に話しかけた。

「いいじやろう。友を助けに行きなさい。いつでも私たちは味方だ。」

そして、ペナルティたちは二手に別れた。まずは、熱斗が先を急い

だ。その後を、荷物を持ちながらペナルティたちがあるいていくというスタイルだった。そうでなければ間に合うとは思えなかった。しかし、いくらなんでも、無理があった。この村からはとても離れていた。それを明日に着こうとするには難しいことだった。

その頃、部下たちにそのことが伝えられた。

「よし。これで立役者はそろうことになるな。」

部下は笑みを浮かべた。

Ⅱ第35話 狙うは獲物？Ⅱ

熱斗はともかく走った。なにも考えずに。ただ、良平を助けるために。時には休憩や立ち止まったりした。しかし、その時でも、良平のことを考えていた。

一方、国王は、このことを随時聞いていた。それを聞けば聞くほど笑みが増えた。

そして、部下にも。この国では、少年を殺すということを平気で言えるようになってしまったのである。そして、本当に実行に移してしまおうとしていた。

いつもなら国王が演説をする広場には、体を固定するための台が用意された。

「さあ、明日が楽しみだ。」

国王は喜びでなかなか寝付けなかった。そのころ、熱斗も、寝てはいられなかった。まだまだ首都は先であった。

後ろを歩いていたペナルティたちは、砂漠の中で寝た。砂が入ってくるが、テントを出すことができないので、しょうがなくここで寝ているのである。

寝静まったころ、後ろに隠れていたスパイが現れた。そして、大きな袋に二人を入れた。しかし、梅園先生を入れるのは大変である。よっぽどの者であることは確かである。

間違いない!!

次の日、熱斗は疲れながらも走った。それにはロックマンも感心した。それとは対照的に、国王は熱斗を殺すことに何かを感じていた。多分、快樂殺人とかいうもののなのだろう。しかし、今はだれもその事実に関心がない。

「ついに、首都が見えた。」

熱斗は、地平線のかなたにある町を見つけた。これが首都のシェルパだ。

そのころ、ちょうどペナルティたちも目覚めた。しかし、周りは白かった。そう。布の袋に入れられ、輸送されていたのだ。梅園先生も気がついたが、いくら暴れても、それはペナルティに被害が及ぶだけだった。

そして、ペナルティたちを乗せたトラックも首都へだんだんと近づいていた。

国王は、部下に呼ばれて広場に出た。国王の顔は笑みが絶えなくなっていた。

熱斗は広場へ向かった。

「順平！」

熱斗は広場に入ると同時に叫んだ。しかし、この後思わぬ事態が熱斗たちを待ち受けていた。

Ⅱ第36話 平和と闇Ⅱ

国王は言った。

「ようこそ。君は、ここで死んでもらう。」

それと同時に、一斉に周りの人たちが襲ってきた。

しかし、周りの人の行動は不思議だった。

まるで、心を持っていないようだった。しかし、そんなことを考えている暇はなかった。

熱斗はたちまち捕まってしまった。

「さて、仲間と死んだほうがいいかな。どうせなら。」

そして、ペナルティたちが袋から出された。

「ペナルティ。」

熱斗は叫んだ。しかし、ペナルティは気を失っていた。

「さつき、すこし暴れたもんで、やっといたのさ。」

国王は冷たく言った。

それに熱斗は地団太踏んだ。熱斗は、手首をうまく動かしながら、PETにチップを入れようとした。

それに気がついていないのか、国王は部下にこう指示した。

「どうせなら、槍でさすんでなく、火の中でうなってもらおうじゃないか。」

そして、熱斗たちのまわりを火が取り囲み始めた。

熱斗は、なんとかうまくチップをPETに入れることができた。

そして、熱斗は、ロックマンとクロスフージョンしたのだった。

「なんだ、あれは。」

国王の指先には、熱斗とロックマンがいた。

国王は、おびえながら、部下に銃を撃たせた。しかし、簡単によけられてしまった。

熱斗は、よけながら、攻撃をした。そして、兵士の中から逃げ出すものが出てきた。

「ちょっと待て。」

国王は声をかけたが、兵士たちはすべて逃げてしまった。

「くそ。」

国王はそんなことを言っていたとき、ある部下が言った。

「どうやら、町を取り囲むように、国民とザイ国の群集がいる模様で、こちらに攻めてくるようです。」

それに国王は焦って逃げ始めた。しかし、国王はすぐに捕まってしまった。

ザイ国の兵士は言った。

「大丈夫だったか。少年たち。」

それに熱斗はうなずいた。

「それはよかった。この国が戦争をもうしないことになったんだよ。君たちが勇敢な行動をしてくれたおかげで。ありがとう。」
そして、それを見つめる男がいた。

Ⅱ第37話 帰還Ⅱ

その騒ぎが始まる前に、熱斗たちは町を出た。ペナルティたちも、国王が出て行く前に、やっと気がもどり、なんとか怪我をしなくてすんだのである。

良平は言った。

「これからどうするんだい。」

それに熱斗は答えた。

「まだ分からない。」

良平は納得したような顔をした。

その時、良平は急に顔色を変え、うなり始めた。

「大丈夫か。」

熱斗たちが言った。しかし、その時には、砂漠に血を吐いていた。

「誰か医者を呼ばないと。」

「その必要はない。」

いきなり、誰かが声をかけた。その声の方向を向くとそこには李がいた。

「李さん。」

ペナルティたちは李の方向を向いた。

「俺の方向を向くんじゃない。良平は最後の言葉があるようだ。聞いてあげなさい。」

そして、また良平の方向を向いた。良平はかすかに言っていた。

「平和にしてくれてありがとう。そして、君たちにありがとう。最後は楽しい人生だった。君たちと出会って……。」

良平は言い終える前に息を引き取った。

「良平！」

ペナルティたちは良平の体をゆすったが、まったく反応しなかった。熱斗は李を殴ろうとした。しかし、李は言った。

「人には最後というものがある。それは、つまらない人生だったりするときもある。しかし、良平はいい顔をしながら行ってしまった。これほど贅沢なことはない。」

「じゃあ、なんで、良平が・・・。」

「それは運命だからだ。熱斗。お前がロックマンと会ったのも運命なんだ。熱斗の心情は今是不安定であることは十分承知だ。しかし、これを変える事はできないんだ。」

熱斗は、自分の姿が分からなくなっていた。

「そういえば、帰ろう。東小金井が大変なことをし始めた。」

「なんだって。」

熱斗たちは、驚いた。あの東小金井は一体、何をし始めたのだろうか？

Ⅱ第38話 東小金井の野望Ⅱ

東小金井は、笑っていた。

「はは。あの少年たちを異世界に閉じ込めたおかげで、進めやすくなった。なあ、」

そして、隣にいる外国人が言った。

「私たちは、こんな地球に絶望したのです。戦争ばかり。人の心はどこへ言ってしまったのでしょうか。あの少年たちだって、今頃は、誰か一人殺しているに違いない。」

そして、大声で言った。

「こんな地球があつてたまるか！！」

そして、東小金井がボタンを押そうとした。

「やめろ！！」

東小金井が高台の下を見ると、そこには熱斗たちがいた。

「くそ。戻ってきてしまうとは。しかし、遅かったな。もう作戦の準備は出来ている。お前ら対策もしっかりとされている。さて、地球よ滅亡せよ。」

そして、再び東小金井はボタンに手を触れた。

「なにが起こるんだ。」

熱斗たちはその恐怖におびえた。

その頃、秩父。観光客の一人が悲鳴を上げた。それに地元の人が気づいた。地元の人も驚きながら言った、

「石切り場から、水が大量に。」

その言葉を言い終わる前に、秩父は水の奥底へ沈んで行った。

「さて、地球は、大プロジェクトによって、どんどん破壊されている。インターネットはパンクし、人々は混乱している。さらには、電気は止まり、人間は生きてはいけないうろう。はは。これで君たちはなにも出来なくなった。」

東小金井は言った。

「くそ。」

熱斗にはなにも出来なかった。ロックマンをプラグインできなかった。

しかし、熱斗はこのまま指をくわえてみているわけには行かなかった。自分に何か出来ることはないのだろうか。と。

その頃、李はあるところへ行っていた。それは、葉山のところだった。葉山たちもまた地球を救うために働いていた。そこへ李は話を持っていったのだった。

Ⅱ第39話 葉山の救いⅡ

熱斗たちはなにもやることなく、東小金井の部下たちによって、捕まってしまった。そして、牢屋に入れられてしまう。

「もう何もやることはないのか。」

ペナルティはそう感じていた。しかし、自分が解決しなければなら
ないのは、まずは牢屋から出ること。しかし、それも不可能に状況
だった。

その頃、葉山たちは現代に来ていた。東京の一部は寸断されていた。
「これが、僕の住んでいた、関東地方なのか。」

その光景に、葉山は気がどっかへ飛んでいつていた。

「それよりも、熱斗という少年たちを助け出してくれ。」

李は二人に言った。そのときだった。

「さて、どうやら、応援が来てしまったようですね。しかも、電波
変換できるんですか。」

東小金井がそこに現れていた。

「いいでしょう。僕だって、そこらの時空マニアではない。いろい
ろなものをもっている人間です。戦いましょうか。スバル君。」

「そういえば、私は、時空を旅した。ということで、君の運命を知
っている。聞ukai。」

それにスバルは言った。

「戦うなら、戦え。」

それに東小金井は驚いた。

「そうですか。では、戦わせていただきます。私が作ったクロ
ーン電波星人で。」

そして、東小金井は電波星人と電波変換した。

「よし行くぞ。スバル。」

ウォーロックが言った。

「電波変換！！星川スバル。オンエアー」

そして、スバルも戦う体制ができた。

「おお。またスバルが、幽霊になった。」

葉山がいつものボケを言った。しかし、スバルはそれに答えている
暇はなかった。

そして、電波同士の戦いが始まった。

しかし、葉山は何もできなかった。いや、スバルのように電波星人を持っていなかったからである。

そして、戦いはどんどん激しくなっていた。

そして、なんとか、スバルは勝利したのである。

Ⅱ第40話 打ち碎けた東小金井Ⅱ

東小金井は言った。

「君たちは強い。しかし、覚えておけ。じきに、君たちにも負えないような事件が必ずやってくる。」

そして、東小金井は立ち去った。

その頃、ペナルティたちも刑務所から解放された。

「大丈夫か。熱斗。」

ペナルティが、飛行機内で聞いた。

「いや。あれは拷問だ。助かってよかった。」

そして、熱斗は眠った。よっぽど疲れていたであろう。

そして、羽田空港に、スバルと葉山、それに李が待っていた。スバルたちには李からある説明がされた。それは、今後熱斗とペナルティと一緒に行動してほしいということだった。

「当、飛行機は、あと5分で羽田空港に着陸いたします。」

飛行機内ではこんなアナウンスが流れた。ペナルティは、寒い北国からやっと帰還するのである。

羽田に飛行機は無事着陸し、ついに、ペナルティたちと、葉山たちは出会った。

「ありがとう。」

熱斗はスバルに声をかけた。

そして、李は言った。

「熱斗、それにペナルティ。今日から、スバルと一緒に行動してほ

しい。」

「どうしてですか。」

ペナルティは聞いた。別にいやではなかった。しかし、理由が聞きたくなつたのである。

「それは、時期にわかる。」

それは、李にとっては言えなかった。そして、一緒に行動することになつたのである。

その頃、ある男があることを考えていた。それは、やはり、電波星人を使つたものだった。

しかし、なぜ電波星人がコピーされるようになったのだろうか。

それは、時空が、一部の人間によって使われ始めたからだつた。

時空は、時には運命を変えてしまうことがある。それは、占い師やほかの予想屋が実感することだ。

しかし、まさか、時空間を人間が移動するとは、今の世界ではありえなかつた。いや、一部の人は知っていたが、大部分は知らなかつた。

そして、それを武器につぎつぎと事件がおきるのであつた。

ペナルティ5ー5（第41話〜第50話）（前書き）

ご覧頂、ありがとうございます。

さて、今回、小説の話数が第46話で、合計300話となりました。
見ていただいてくれてありがとうございます。

ペナルティ5ー5（第41話〜第50話）

Ⅱ第41話 JR攻撃作戦Ⅱ

東京で最初に電車運行が開始されたのは、当時の総武鉄道、飯田町（飯田橋）〜中野の間である。

ところで、またもや秋葉原。

メイドカフェの少女たちが駅前で宣伝をしているとき、ある男がまた起こそうとしていた。（こんどは、何オタクだ？）

その男は、高崎から来ていた鉄道オタクだった。

しかし、ある不満があった。それは、秋葉原に新幹線の駅がないことだった。

ふつう、高崎からの場合、通勤電車（前は近郊型だったものの、JR東日本が作ったE231系という車両は、両方共通のため、このように称した）

で2時間、しかも、上野で地平ホームから山手線外回りへは5分以上かかるので、結局は、所要時間は2時間30分ぐらいかかるのである。

そして、男は、雑誌である広告を見つけた。それは、

「なんでも、あなたの反抗を表に出すのを手助けします。」

というものだった。最初は男には理解できなかった。しかし、あの事件を見て分かった。

秩父の山から水が噴出し、死者が出たというのはニュースになった。

そして、男の家のポストにあの雑誌に載っていた広告が入っていて、その中に秩父の事件は私たちがやりましたと書いてあったのだ。

そして、ついに決意した。

秋葉原のある雑居ビルに男は行った。そして、雑誌の広告の会社へと赴いた。

「今日は、何を社会にやってほしいのでしょうか。」

応対した女はこう言った。

「僕は、ここに来るまでに、2時間と30分かかる。それを解消するため、秋葉原に新幹線を止めたい。」

「なるほど。でしたら、JRを攻撃しますか。」

女は唐突に言った。ふつうこんな会話は出来ない。

男はうなずいた。しかも、すぐに。

もう、男は気が狂っていた。そして、作戦はスタートしたのだった。

Ⅱ第42話 犯人集団Ⅱ

そして、女の上司はそれを聞いて言った。

「この前は、未来からきた少年たちによって、我々がたくらんでいた作戦が失敗した。あの電波星人は、ウイルスに犯されていたが、見事にあの少年に倒された。今回は対策を考えてから行おう。」

「で対策とは。」

女は上司に聞いた。

「それはな、あの少年たちを犯人にしてしまえばいいのだ。」

「なにを」

女は上司の言葉に驚いた。しかし、上司にはそれができた。

上司は電波星人にこう言った。

「おい、星川スバル、光熱斗、ペナルティ、葉山の4名に罪を着せて、それによって、4人を警察に捕まえさせろ。」

そして、電波星人は、どこかへと消えた。

その頃、熱斗たちは、警戒していた。クローンの電波星人が現れるとは思ってもいなかった。

電波星人は、あるビルに登ると、音波を発し始めた。

そして、人々の中に、スバルたちが犯人であるということが刷り込まれた。

ふとニュースをつけた梅園先生が驚いた。

「おい、俺たちが犯人になっているぞ。」

それに、空気が凍った。

「・・・情報によりますと、今日、全国に指名手配されたようです。氏名と罪状は、光熱斗。浮気罪。星川スバル、不登校罪。梅園仁慈、ゲイオタ罪。その他、膀胱罪（あれ、違うような・・・）です。」

熱斗は、なぜか、そのニュースにこんな突っ込みを入れた。

「別に、浮気した覚えはない・・・」

熱斗は、いきなり詰まってしまった。脳裏には、あることが思い出された。

それは、ジャスミンのことだった。

まさか、それで・・・。メールが・・・。

何か熱斗の頭の中に妄想が錯誤していた。

それを分かっている人間はいなかった。いや、それは難しかった。そして、これから、熱斗たちは警察や市民に追いかけられるのである。

Ⅱ第43話 闇の取引Ⅱ

その頃、新宿。夜の街に変身した歌舞伎町では、なにやら雑居ビルの中で刺青を入れた日本人の男と中国人の男が話していた。

「今度のターゲットはこいつらですな。」

「ああ。フィリピンで高く臓器が売れるぞ。児童売春でもいいな。」

「ああ。」

そんな怖い話を、日本人と中国人がしていたのである。

そのころ、熱斗たちは追われていた。

「ともかく、人ごみの中に隠れるのが一番だ。」

梅園先生はそういった。

「ここらへんで、人が多いところはどこだ。」

そして、それに葉山が答えた。

「競馬開催時の船橋競馬場。」

「馬にでも蹴られている。」

珍しく梅園先生まで怒ってしまった。

「新宿、歌舞伎町はどうだ。」

ペナルティが恐る恐る言った。

「それはいいな。」

梅園先生は言った。もう夕方だ。サラリーマンたちが集まりだしてくる頃だ。

そして、熱斗たちは新宿へ向かった。

「作戦は成功しました。」

電波星人は言った。

「そうか。」

上司はそれになにやらぬ顔で言った。

そして、部下の女を通じて、高崎の男に電話がかけられた。

「履歴書もお願いします。」

女は電話口でそう言った。（こういう展開にしないと、名前が分からないので・・・）

そして、男は履歴書を持って、秋葉原の雑居ビルへ来た。

「それでは、契約書にサインをお願いします。」

そこには、名前と住所を記入するところがあった。

そこに、

「多々良 朗」

と書いた。

多々良が書くと、説明を受けた。

「これは、ブラザーバンドといい、この中に、あなたをサポートしてくれる召使のようなものがいます・・・」

女の説明は長かった。それを多々良はウル覚えながらに混雑する通

勤電車で帰った。

Ⅱ第44話 夜の新宿。新宿Ⅱ

すっかり日が暮れた新宿。そこは、歓楽街としての顔と、裏としての顔があるといわれている。

裏では、麻薬などの売買がされているといわれている。

そんなところへきてしまった熱斗たち。

そうした動きを刺青を入れた男たちは捉えていた。

「さて、では、獲物を採りますか。」

日本人の男が言った。

「ああ、いいだろう。」

中国人の男が返事をした。

そして、夜の歌舞伎町に踊り出た。

熱斗たちは、人ごみの中をさまよっていた。

「おい、その軍団、ちょっと来い。」

熱斗たちが裏道に入ろうとしたときに、刺青を入れた男たちに見つかってしまった。

「おい。そこを動くと、痛い目あうぞ。」

刺青を入れた男たちは、熱斗たちを捕まえるとある雑居ビルの中に入らせた。

そこは倉庫のように暗かった。

「お前ら、今追われているだろ。」

中国人の男が熱斗に問いかけた。

「はい。」

「そうか。では、こんなのは、どうだろうか。お前たちの体を担保に警察に刑を軽くするよう要求するというのは。」

それは、信じられないものだった。指をとられるならまだしも、体をとられるのである。

しかし、熱斗たちは考え出した。

それしか自分たちに解決する方法はなかった。
いくら警察に言ったって、警察はまともに取り合ってはくれないだろう。

しまいには、どうなるか分からない。

熱斗たちにはわかっていなかった。まさか、ある男によって、運命を変えられたとは。

そして、究極の選択をだしてしまった。

それは、男たちと契約することだった。

それは、ある意味、熱斗たちが戦いから逃げたのと同じだった。

しかし、熱斗たちにはそれしか方法が見えなかった。

人間というのは、いつでも、あわてる時がある。見えないのである。
いい方法が・・・。

Ⅱ第45話 JR襲撃Ⅱ

熱斗たちが、男たちと契約してしまった次の日の朝。JR東日本、東京総合指令センター（細かつ。）

ATOS（東京圏管理システム）というプログラムにそって、指令が次々と出されていった。

そこの近くのビルにあの男がいた。

「さてと、東京の周りの鉄道を止めるか。」

「ああ。」

多々良は、電波星人を送り込んだ。

「システムが暴走し始めました。」

電波星人が送られた数分後、指令員は、システムが暴走していることに気がついた。

「何が原因なんだ。」

指令長は、頭を悩ませた。しかし、すぐに悩まされることがなくなった。

それは、電波星人が、特殊な電波を使い、指令所の人々をたちまち

眠らせたからだ。

そのころ、新宿駅。

駅員も、システムがおかしいことに気がついていて。しかし、指令所に連絡しても返事は帰ってこなかった。

そして、電車は次々と出発していった。

この頃、初めに事故が起ころうとしていた。

それも複数箇所だった。ポイントが切り替わらなくなり、電車が衝突寸前になった。

そして、どんどんと、首都圏のJR線が止まった。

そのニュースは熱斗たちも知っていた。

「これが出るのは多分、未来の技術だ。」

ペナルティが言った。企業のシステムは厳しいセキュリティになっているからだ。

そして、行動に移そうとした。しかし、肝心の電車が動いてない。

「どうすればいいんだ。」

熱斗は言った。その時、梅園先生が言った。

「しょうがない、タクシーを使おう。」

「でも、そんなお金、どこになるのさ。」

「それなら大丈夫さ、ここに。」

そこには、一万円札が入っていた。一体このお金はどこから来たのだろうか（当然だが、未来の日本では紙幣が変わっている？）

そして、熱斗たちは、タクシーを拾った。

「お客さん。どこまでいきますか。」

タクシーの運転手が熱斗たちに聞いた。

「えーと。JR東日本の指令センターまで・・・。」

その名前に運転手は困った。いくらなんでも、そんなのを知っている人は、JRの職員ぐらいだろう。

その間にも、どんどんと鉄道は麻痺していくばかりであった。

Ⅱ第46話 かすかな電波Ⅱ（ペナルティシリーズ合計300話目）

「どうすれば……。」

タクシーを降りた熱斗たち。お金はあっても、行く先が分からなければタクシーだって使えない。

「スバル。」

ウォーロックは、スバルを呼んだ。

「なんだよ。ウォーロック。」

「かすかな電波を追っていけば、いけるかもしれない。」

「なんでだよ。ウォーロック。」

スバルは怒った。しかし、ウォーロックには、もうすでにかすかなほかの周波数の電波を感じていた。

「行くぞ、スバル。」

ウォーロックがスバルを引っ張り始めた。

「どこ行くんだ。」

後から、熱斗たちが追いかけていく。

そして、ある建物の前に来た。

そこには、小さく、「JR東日本（株） 東京指令所」と書かれていた。

ウォーロックは言った。

「これは多分、電波星人の仕業だ。」

スバルはビジライザーをかけた。

東京指令所は、オフィス街の一角にあった。そこは人通りが多い。

「……あのお兄ちゃん、何をかけているの。」

「やめなさい。指でさすのは。」

子供に注意する母親がいるくらい、その光景は不思議だった。

しかし、スバルだって、これには慣れてしまっている。未来だって、ビジライザーを持っていると驚く人がいるくらいだ。

「やっぱり、ここからだ。」

スバルは言った。

「じゃあ、中に入ろう。」

「ちよつとまで、入れないんじゃ。」

梅園先生が言った。たしかに、ちゃんと、玄関には、入館証が必要だと書いてあった。

「それなら大丈夫だ。」

ペナルティたちが後ろを振り向くと、そこには、李の姿があった。

「李さん。」

「これを使え。そうすれば、入れる。」

李は入館証を渡した。

そして、ペナルティたちは、電波星人と戦うことになるのであった。中へ入ると、すぐに鉄のドアがあった。

「開いてみよう。」

葉山がドアを開いた。

そこには、倒れて寝ている職員がいた。そして、モニターには電波星人がうっていた。

「ようこそ。スバル君。」

電波星人はそう言ったのだった。

Ⅱ第47話 指令所の戦いⅡ

電波星人を見つけたスバルたち。

早速、スバルはウォーロックと電波変換した。

「戦うか。」

電波星人は、準備の体制をとっていた。

その頃、東京指令所の周りでは報道陣がたくさん来ていた。

「・・・どうやら、中で何かが行われたようです。」

テレビ東京の天気お姉さんである矢玉もなぜか、今日はここで天気

予報?!（あれ、はれときどきぶたの世界観に混ざってるぞ。）

電波星人と『電波世界のヒーロー、ロックマン』との戦いが始まった。

熱斗たちから見ると、スバルが誰と戦っているのかはわからなかった。

しかし、戦いは行われていたのである。

どちらも同じ力だった。

いくらスバルががんばっても、敵は倒れなかった。

もうそろそろ、運行をスタートしないととんでもないことになる。

スバルたちはそう思っていた。時間は、午後3時25分（小説を書いている時間やないか?）

あと二時間ほどで帰宅ラッシュがスタートする。

スバルはともかくがんばった。

そして、ついに電波星人は逃げた。最後には、電波星人は何も言わず消えたのである。

「おお。」

電波星人がいなくなってから数分が経っていた。今まで眠らされていた指令所の職員が目を覚ました。

しかし、もうその頃にはスバルたちはいなかった。

なぜなら、電波星人によって、あの日本人と中国人に追われることとなったからだ。

その日本人と中国人は新宿で、鉄道が止まったというニュースを聞いていた。

「それじゃあ、もうそろそろ、あの少年たちを狩って、煮たり、焼いたりしますか。」

「ああ、煮たり、焼いたり……。ね。」

中国人と日本人は不気味な発言をした。（ついでに煮たりは、使いまわしということで、焼いたりとは、最後に売れるものは売ってしまえということだそうです。）

ここからは諸事情により第52話まで非公開です。事情については、後述。

ペナルティ5ー5（第41話〜第50話）（後書き）

Ⅱ第48話〜第52話までの話の非公開についてⅡ

本日も、ペナルティ5をご覧頂、ありがとうございます。

さて、この作品では、皆様に楽しんでいただけるように一定の規制（暴力シーンなど）を作者の中で設けていますが、今回、話の都合により、どうしても規制に引っかかる可能性が出てまいりました。このため、今回だけ、特別として、第48話〜第53話につきましては、その部分を、第54話の本文にあらすじとして掲載して対処していく所存でおります。

閲覧者の皆様には大変ご迷惑をおかけしますが、あらかじめ、ご了承ください。

ペナルティ5－6（第51話～第60話）（前書き）

大変お待たせしました。第54話からのスタートとなります。

ペナルティ5－6（第51話～第60話）

Ⅱ第54話 心の中Ⅱ

<あらすじ>

契約してしまった以上、日本人と中国人は、スバルたちを必要以上を追った。

別に、スバルたちには何も罪はなかった。

しかし、無理矢理着せられた罪を軽くしようと、スバルたちは契約してしまったのだ。

そして、ついに捕まったスバルたちに重労働が待ち受けていた。

その重労働にどんどん疲れていくスバルたち。果たして、この重労働を止めることはできるのだろうか。

そして、その重労働から救ってくれたのは李さんだった。

李は体をはって、スバルたちを助けた。

李はスバルたちにある命令を下すのであった。

~~~~~

「熱斗、スバル、ペナルティ、葉山。お疲れ様。私は、もともと、君たちの純粋な心に引かれて、いろいろな任務を与えてきた。いや、僕だけじゃない。いろいろな人がだ。

しかし、熱斗たちには、もうだめなのかもしれない。

俺には熱斗たちの心の奥底が手にとって見える、その心はもうくすんでいる。

多分、俺にも直せないだろう。それが、人間というものだ。

ある意味では成長なのかもしれない。しかし、これは、純粋な心を無くしたという重大なことだ。

残念だが、もう純粋な心は戻せないだろう。

大人はそうだ。

現実を見れば、過労死している人だっている。それを誰が作ったか、それは、大人なんだよ。

大人に純粋な心がなくなってしまったからこそ、今、いじめや過労死の問題がでるんだ。

そして、子供たちにまでその汚い心が出始めている。

スバルたちはまだ純粋だが、やはり、熱斗たちは心が汚い心になり始めている。・・・」

「汚い心って何だよ。」

熱斗は、李に怒るように言った。

「それは、我慢することであると思う。」

李は言った。

「我慢すれば、いつかは罪が解けた。しかし、一刻も早く罪から逃れるために、熱斗は体を担保としてしまった。そして、さらに過ちへとつながっていった。」

それに熱斗は気づいた。

今までよりも、楽をしたくなっていた。確かに罪だって、いつかは消えたのだ。

どうしてこうなってしまったのだろうか。

それは、熱斗が成長したからだ。

いろんな意味での成長を。

今まで、あんなことをやられていたのに、すこし、興味を持ってしまっていた自分がいた。

心の中は変わっていた。李が言うとおりに。

「熱斗。君の人生が終わったわけではない。まだまだいろいろな出来事がある。それを解決していかなければならないのだよ。」

李の言葉はまるでお告げのようだった。しかし、まだ心では葛藤があった。

李は熱斗に言った。

「では、ある試験をしよう。それで、俺がオケーだと判断したら、ここにいさせてあげよう。しかし、俺がだめといったら、これで解散だ。」

熱斗は悔しそうに言った。

「ああ、いい。」

そして、李はあるところへと熱斗たちを連れて行った。

そこは、空の上だった。

まるで、天国にでも来たような感じがした。

「さあ、この席に着け。」

李が熱斗に指示をした。そこには確かにいすがある。

そして、熱斗は席に着いた。

「これから、第3323回、想対実技テストを開始する。」

李はこう叫んだ。

そして、いきなり、熱斗の視界からさっきの空間が消えた。

「ここは・・・。」

熱斗は一人知らない町に立っていた。

ペナルティやスバルたちはいなかった。

そして、その代わり、公園で子供たちが遊んでいた。

「君は見慣れないねえ。」

一人の老人が声をかけてきた。熱斗は、老人にいきなりこんなことを話した。

「実は、急にここに来て・・・。」

それを聞いた老人はこう言った。

「では、あなたは旅人というわけですか。」

老人はため息をつくと言った。

「人生というのは、いきなり狂うものだということを知っているか

ね。」

熱斗はうなづいた。

「それなら、話ははやいではないか」

老人は、黙ってしまった。

しかし、熱斗には分からなかった。そのうち、老人も公園を立ち去って行った。もう夕日が地平線に沈もうとしていた。

「どうしよう。」

熱斗はそう思った。公園で寝るという手もあるが、なにしろ、夕食をどうすればいいのか。それが心配だった。

風景がきれいな田舎町で熱斗は困ってしまった。

「ともかく、夕食を食べなきゃ、死んでしまう。」

「いやそれはないよ。一食ぐらいなら。」

ナビのロックマンが突っ込みを入れるが、人間食べなくては欲求が満たされないのである。

Ⅱ第56話 おいしいものを求めて・・・Ⅱ

熱斗はともかくいろいろな家を訪問した。

「・・・せめて夕食だけでもいいので食べさせてください。」

それを数件の家でやった。しかし、なかなか夕食を食べさせてくれなかった。

そして、路頭に迷うと、ある少女が熱斗のところへよってきた。

そして、少女は言った。

「私のうちでよければ・・・。」

その話には熱斗はすぐにのってしまった。

ともかく今、熱斗に必要なだったのは夕食であった。

そして、少女の家へたどりついた。

少女の家には老夫婦がいた。

「あれ、お母さんは？」

熱斗は少女に聞いた。

それは少女に禁句だった。しかし、熱斗はそれを知らなかった。少女はうつむいたまま、台所へ向かって走っていった。

「すまん。」

そこにさっき、公園にいた老人がいた。

「一体、どういうことですか。」

熱斗は老人に聞いた。

「いや、実は、公園での話をしたら、洋子が飛び出して君の事を探しに行っちゃってね。実は、あの子は、私たちの娘の子供でね。ただ、かわいそうに、娘とあの子のお兄ちゃんは交通事故で死んでしまった。そして、あの子だけが私たちにひきとられたんですよ。」  
「どうやら、あの少女にはつらい過去があったらしい。」

「おじいさん、そして、旅人さん。夕食の準備ができましたよ。」

台所にいたおばさんが熱斗たちを呼んだ。

熱斗たちは食事の席についた。

そして、熱斗は料理を大量に食べた。どうやら、それほどおなかですいていたようだ。

その光景を少女はただ、見ているだけであった。

そして、食事が終わり、風呂の時間がきた。順序よく、交代に風呂に入って行った。当然、熱斗もだ。

そして、あつという間に就寝の時間になった。

「そういえば、寝る場所がないな。」

おじいさんが言った。おじいさんは、少女にこう言った。

「今日は旅人さんを寝かせてあげてくれないか。」

それに少女はうなづいた。

おじいさんは、熱斗に、

「良かったな。」

と言った。ある意味、仲直りする絶好のチャンスだった。それは、



おじいさんにも分かった。

Ⅱ第57話 二人の仲直りⅡ

熱斗と少女は二階へ上がった。

「ここが私の部屋よ。」

少女の部屋は案外広かった。

多分、少女のお兄さんがいたら、二人で使っているだろうと熱斗は思った。

それにしても、熱斗はちよつと緊張していた。

それは当然かもしれない。熱斗だって、今まで、男たちに囲まれていたか、一人で寝ていたからだった。

しかし、今回は、少女と二人である。

熱斗が立っていると、少女が、少女の部屋の向かい側にお部屋の押入れから布団を出してきた。

「この布団を使って。しくのは自分でやってよ。」

熱斗はその広い部屋に少女と川の字になるように布団を敷いた。

「じゃあ、電気消すわよ。」

少女は熱斗にそういった。

そして、電気が消された。窓からは、夜空が見えた。

「この町って、きれいだね。」

熱斗がいきなり少女に話しかけた。

「そうよ。私、この町、大好きなの。」

少女ははっきりと答えた。

「・・・あのさ、さっきはごめん。」

熱斗は少女にいきなり謝った。

少女はそれにこう答えた。

「それは、私のほうだね。あなたは何も知らなかったですもの。それなのに、こんなことであなたを不安にしまって・・・。

でもね。私は、お母さんとお兄ちゃんがとても好きだったの。お母

さんは優しくかったし、お兄ちゃんだって、小さいのに私の面倒見てくれたんだもん。」

熱斗は、なんとなく、心が痛んだ。

「おやすみ。」

少女は熱斗にこう言って、寝てしまった。

熱斗もそのうち、うとうととしてきて、やがて寝てしまった。

次の日、朝ごはんを食べて熱斗がゆっくりしていた時に、玄関に来客が来た。

「おい。村山。」

どうやら、少女の友達らしい。少女は玄関へと向かっていった。

熱斗の耳に玄関の会話が聞こえてきた。

「・・・そういえば、昨日、少年を泊めたんだって。」

「うん。」

「あんまり、そんなことすんな。都会から来て、この町を荒らしに来たのかもよ。」

「でも、心優しそうよ。」

「それで、騙されるんだよ。もしも、いるんだったら、出せよ。」

その話を聞いた熱斗は玄関に向かったのであった。

## Ⅱ第58話 佐田Ⅱ

熱斗が玄関に向かうと、そこには少年がいた。

「お前が、昨日、いろんなところに泊めさせてくださいって言った奴か。」

それに熱斗は返事するしかなかった。

「さては、お前、金ほしさに都会から田舎まで来たのか!!」

「いや、違うよ。」

「そんな嘘ついたって、だめだ。この佐田<sup>さだ</sup>さまが相手してやる。ついて来い。」

佐田という少年についていった熱斗。佐田は山の獣道をどんどん進んでいく。

熱斗はそのあとをついていく。

そして、佐田は、川にかかるコケがついた丸太の前で止まった。

「もしも、これが渡れたら、俺たちの仲間にしてやる。」

佐田はそういった。それに熱斗は答えた。いや、熱斗はなぜか、そういう性格なのだ。

熱斗はその丸太橋を渡り始めた。

しかし、足が滑って、熱斗は清流の中に落ちてしまった。

「まだまだだ。」

熱斗は川から立ち上がると、また丸太橋を歩き始めた。

そして、何回もそれが続いた。

熱斗の服はもう水浸しになっていた。

その光景を佐田はずっと見ていた。

そして、いつの間にかお昼になっていた。

佐田はついに、熱斗に話しかけた。

「もういいよ。俺が折れる。お前は、いい奴だ。そして、これから俺たちの仲間だ。」

それは佐田も言いたくなかった。

佐田だって、ガキ大将だ。

ガキ大将が簡単にこんなことはいえない。

その佐田に認められたのだ。

熱斗は喜んだ。

そして、熱斗は服がぬれながらもあの居候の家に戻ってきた。

家で応対にでたおばあさんは熱斗の姿にびっくりした。

「まあ、まあ。そんなにぬれてしまつて。さあ、おあがり。」

おばあさんは、急いで熱斗を家の中に入れた。

家の中には入ったものの、代わりの服がなかった。

「しかし、何をやりにいったの。」

おばあさんは熱斗に聞いた。さすがに洋子も熱斗の状態に目をつぶ

ってしまった。

熱斗もあまりこたえる気はなかった。

## Ⅱ第59話 集会へ Ⅱ

その日、熱斗は外には出られなかった。

そして、夕食の時になった。

洋子は熱斗に話しかけた。

「今日はごめんね。この町って、田舎だから、都心の子って嫌いな  
のよ。だからあんな無理矢理な理由をつけて・・・。」

熱斗はそれにこう答えた。

「いや、いいんだよ。しかも、友達が増えたしね。」  
それに洋子は安心をした。

その夜も熱斗は、洋子の部屋で寝た。

次の日の朝も、佐田が来ていた。しかし、今回は違う用件で来ていたのだ。

熱斗は洋子に呼び出されると、佐田が言った。

「お前も仲間に認めた。そして、今日から北頸木町<sup>きたくびき</sup>少年少女団の仲間として、活動してもらうぞ。」

佐田はかしこまった口調で言った。

そして、佐田を先頭に熱斗と洋子は広場へときた。

広場には小学生くらいの子から中学生までいた。

「今日は、新入部員を紹介する。光熱斗だ。」

佐田は最初に熱斗を紹介した。

そして、紹介し終わると、佐田は今日の活動内容を発表した。

「僕たち、北頸木小<sup>きたくびき</sup>中学校、少年・少女団の今日の活動は、俺たちの同級生、石川と喜田山<sup>きたさん</sup>に遠足に行くことについて話し合いたい。」

「石川？」

熱斗はその人物がどういう人物かを知らない。

しかし、佐田の話は弾丸のようにどんどんと出て行く。

思わず、熱斗は洋子に聞いた。

「石川って。誰？」

それに洋子はこう答えた。

「そうよね。知らないよね。熱斗は。」

そういうと、洋子はこう熱斗に聞いた。

「帰り、石川君の家に行きましようか。」

それに熱斗はうなずいた。

そして、一通り会議が終わった。

熱斗と洋子は、そのまま石川君の家へと向かった。

「ごめんください。」

洋子が入ると、急いで石川君のお母さんが出てきた。

「あら洋子ちゃん。いらっしやい。」

石川君のお母さんはそういうと、後ろにいた熱斗のほうを向いた。

「あれ、あの子誰？」

それに洋子は答えづらかった。

それを察知したのか、石川君のお母さんは熱斗と洋子に中へ上がるように行った。

中にあがるとそこにはベッドとそこで寝ている少年、石川君がいたのだった。

## Ⅱ第60話 石川君Ⅱ

石川君はベッドから洋子にゆっくりとこう話しかけた。

「ようこちゃんいらっしやい。」

熱斗は洋子に聞いた。

「石川君って……。」

それに洋子はこう言った。

「ええ。昔、小学3年の夏に、うちの村を走る国道でトラックに轢かれてしまって、それで、なんとか一命は助かったのだけでも、下半身がやれてしまったの。それで今では、おばさんが面倒を見ているの。」

熱斗はしばらく黙っていた。

：意外と佐田っていい奴じゃん：  
熱斗はそう思えた。

そして、石川君のお母さんがジュースを持ってきてくれた。

「ありがとうございます。おばさん。」

洋子は石川君のお母さんにお礼を言った。

そして、洋子は、今日の集会で決まったことを話し始めた。  
それを石川君のお母さんが聞き終わると、こう言った。

「その気持ちはありがたいのだけれども、喜田山にこの子が登れるとは思わないの。車椅子が転倒するかもしれないし、もしもそれで怪我でもしたら・・・。」

石川君のお母さんの心情は微妙だった。

昔、よく家族とも、そして、佐田とも山登りに行った喜田山。

しかし、下半身が動かなくなった時から喜田山には一度も登っていない。

確かに、あの山なら登山道がきちんと整備されているけども、やはり、山道であるから、たまにでこぼこしている。

石川君のお母さんは洋子に言った。

「分かったわ。考えてみるわ。」

石川君のお母さんの心の中は揺れていた。

帰り道、熱斗は洋子にこう言った。

「大変だね。石川君って。」

「ええ。」

熱斗は石川君を山に登らせてあげたいと思っていた。いや、熱斗だ

けではなかった。

佐田だって、そう思っている。

熱斗は石川君に何かやってあげなければという使命感があった。  
なにせ、ずっと石川君はベッドの上だ。

学校にも行けないだろう。

だからこそ、石川君にいい思いをさせてあげたかった。

そして、次の日から、石川君を安全に登山させるための話し合いが行われることになったのだった。

**ペナルティ5－6（第51話～第60話）（後書き）**

今回、話が最終章へと突入して参りました。

最後のテーマは、障害者を助けるということです。

熱斗にはその心があることは分かりました。

しかし、まだ実現できるかは分かっていません。お楽しみに。



## 第61話〜第63話（完結）

Ⅱ第61話 何も出来ない…Ⅱ

しかし、次の日、事態は急展開した。

朝、洋子の家に一本の電話がかかってきた。

それは石川君のお母さんだった。

洋子は電話を置くと、熱斗に言った。

「やっぱりだめだった。」

洋子は熱斗に言った。

洋子と熱斗は言葉を失った。

そのことは、佐田にも伝えられた。

佐田もきつと悔しがっているだろう。

“石川君には無理がかかりすぎるのであろう、と熱斗は思っていた。熱斗はとくにやることなく、その日をすごしてしまった。

熱斗は寝る前に思った。

「一体、いつになったら試練が終わるのだろうか。」

そして、その夜は過ぎて行った。

次の日。熱斗が起きた。しかし、熱斗の体にはある異変が起きていた。

それは熱斗でも分かった。前にも経験したあの暑さ。

そう。熱斗は熱を出したのである。

しかも高温だった。

至急、洋子のおばあさんは集落にいる医者である江川を呼んできた。江川はこう言った。

「私にも分かりかねますが、とても高熱です。でも、インフルエンザらしい症状もない。ただ、高熱を発しているだけなのです。しかし、この熱はどんどん高くなっていくように思えます。ともかく、氷で体を冷やしてあげてください。」

熱斗は苦しかった。とても体が熱くなっていたのだ。

それは、熱斗だけでなかった。なぜかロックマンも同じような現象に襲われていた。

しかし、だれもナビの存在など知る由もなかった。

そして、おばあさんは家にある氷を熱斗の頭の下に入れてあげた。

しかし、一時間もするとその氷は解けてしまった。

「もう、これじゃあ、うちの冷蔵庫では間に合わない。洋子。じいさん。集落の人たちから氷をもらってきてちょうだい」

そんな状態が一日中ずっと続いたのである。

## Ⅱ第62話 急な別れⅡ

その夜、洋子の家族は、看病に疲れて、ぐっすりと眠ってしまった。そして、熱斗も……。

そのとき、李はあることに気がついていた。

李は、試験を受けていないペナルティたちにこう言った。

「もう解散だ。」

ペナルティたちは理由を聞いた。

しかし、そのとき、李は答えなかった。

そして、李は熱斗の元へと向かって行った。

「熱斗。熱斗」

李は熱斗を起こした。

「李さん・・・。」

「ああ。大丈夫か。」

李は熱斗の様子を見て、あることが頭に横切った。それは、時空病だった。

「熱斗。多分、今の様子から見ていると時空病に違いないなあ・・・。」

その言葉は、同時に熱斗に、ペナルティやスバルたちに会えなくなることを意味していた。

熱斗は言った。

「なんとか、続けていきたい・・・。」

しかし、李は首を振った。

李は熱斗に言った。

「一回、時空病にかかってしまうと、もう二度と時渡りはできないんだ。もしも、時渡りをすれば、熱斗の体は一瞬のうちに、なくなってしまう・・・。」

李は続けて、言った。

「熱斗、残念だが、今のうちに洋子たちを別れなくてはいけない。一刻も早く、君を元の世界に戻さなければならぬのだ。」

熱斗は横で疲れ果てて寝ていた洋子と、洋子のおじさんやおばさんに別れの言葉を告げなくてはならないときがきた・・・。

「洋子、おじいさん、おばあさん。本当にありがとうございました。いろいろと経験できたような気がします。」

それだけしか熱斗には言えなかった。いや、もうこれ以上言葉を話すと、涙が出てきそうだったのである。

熱斗は洋子たちともっと話したかった・・・。  
しかし、それはもうかなわない。

李と熱斗はペナルティやスバルのところへと急いだ。

熱斗と李さんは、ペナルティたちの前にいた。

そして、李は言った。

「残念だが、今後も活動できなくなってしまった。しかし、もう、一人一人に地球を守る力は十分とっていいほどついている。これから、それぞれの道を歩んでいけ。」

李さんにはそれしかいえなかった。

「じゃあなあ、ペナルティ、スバル。」

熱斗は一足先に戻ってしまった。

いや、それだけ熱斗の容態は安定しなかった。

「僕たちも、もう会う機会はないだろうなあ。葉山。」

スバルは葉山に声をかけた。

スバルはこんなことを言い始めた。

「僕は、葉山や熱斗のおかげで、少し自分が明るくなったような気がするんだ。本当にありがとう。葉山。」

葉山は、その言葉に胸をすでに打たれていた。

期間は短かったが、葉山にも、スバルには、とても長く感じられた。

そして、ペナルティにも同じことが言えた。

ペナルティは心の中でだが、熱斗たちに会えてよかったと思っていた。

しかし、すでに、熱斗たちはいなかった。

そして、李が戻ってきた。

「さあ、君たちも、帰る時間だ。」

ついに、残りの三人にも元の時代に帰るときがきたのであった。

「じゃあなあ。元気だなあ。」

そして、三人はそれぞれの道を歩んで行った・・・。

ペナルティも元の時代に戻った。

もう、時代はすすんでいた。

ペナルティももう中学三年の終わりだった。

しかし、ペナルティは思った。

「これはこれで、中学の勉強とは違ったものが学べた。いや、もしかすると、今まで、誰も学んだことのないようなことである。」

そして、今は何も跡形がなく、人の中から記憶が消されてしまっている。

しかし、いずれか、時代が進化すれば、人々のなかから、他の時代へとタイムスリップしなくてはいけないときがくるのである。

ほら、未来では、ナビと一緒に生活しているではないか・・・。

（完結）

## 第61話〜第63話（完結）（後書き）

今まで読んでいただき、ありがとうございました。

〈追記〉

ロックマンエグゼTR（NO388C）

新たなストーリーが出来ました。

今までのペナルティシリーズとはまた違った話です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1828b/>

---

ペナルティ5

2010年10月10日18時13分発行